

名取市歴史民俗資料館年報

— 令和3年度 —



2022年6月

名取市歴史民俗資料館

名取市歴史民俗資料館年報

— 令和3年度 —



2022年6月

名取市歴史民俗資料館

目次

I. 施設の目的	1
1. 施設の目的	1
II. 事業概要	1
1. 事業概要と利用状況	1
(1) 令和3年度の事業概要	1
(2) 利用状況	2
(3) 令和4年度の主な事業計画 (①展示・公開事業、②学習・交流事業、③体験学習事業、④調査研究事業)	3
2. 開館1周年記念事業	5
3. 来館者1万人達成式典	5
4. 展示・公開	5
(1) 常設展示 (①オリエンテーションルーム、②考古の展示室、③歴史・民俗の展示室)	5
(2) 企画展示 (①第4回企画展、②第5回企画展、③第6回企画展、④第7回企画展)	8
(3) 名取市図書館情報発信コーナー	9
5. 学習・交流活動	9
(1) 歴史スポットめぐり (①市内歴史スポットめぐり、②熊野三社歴史ウォーキング、 ③なとり古墳ウォーキング、④旧中沢家住宅 屋根葺き替え工事見学会)	9
(2) 資料館まつり	11
(3) 歴史講座 (①第1回、②第2回、③第3回、④第4回)	12
(4) 講演会	12
(5) 各種案内・マナビィ出前講座・展示解説案内 (①各種案内等、②マナビィ出前講座、③展示解説案内)	13
(6) ボランティア	13
(7) 市内小学6年生の訪問学習	14
6. 体験学習活動	15
7. 調査・研究活動	16
8. 資料管理・利用	16
(1) 収蔵資料利用	16
(2) 資料調査	16
(3) 寄贈・寄託	16
(4) 収蔵資料整理	16
(5) 燻蒸・調査	17
9. 刊行物	17
III. 資料	18
1. 施設概要	18
2. 組織・職員体制	19
3. 予算	19
4. 条例・規則	20
5. 沿革	22
IV. 調査・研究報告	23
1. 名取市十三塚・飯野坂遺跡出土の勾玉・管玉について	23
2. 名取市十三塚遺跡出土の遠賀川系壺再報告	33
3. 名取市温南山古墳出土の形象埴輪	34

I. 施設の目的

1. 施設の目的

名取市歴史民俗資料館は、約2万年にわたる長い歴史の中で蓄積され、大切に受け継がれてきた歴史文化を、保存・活用するための拠点として整備されました。それらは郷土の歴史や成り立ち、先人たちの営みを知る上で欠かすことの出来ない国民共有の財産であり、永く後世へ受け継いでいく必要があります。当資料館では、この大きな目標の達成に向けて、以下の様な目的を持った活動を行っていきます。

- 1) 展示や歴史的な体験活動を通して、名取の歴史文化に触れる機会を提供します。
- 2) (郷土の歴史文化に関わる) 歴史的な体験などを通じて、歴史文化への興味関心を高めます。
- 3) 歴史文化やふるさとへの関心を高め、歴史文化の保存・活用を図ります。

II. 事業概要

1. 事業概要と利用状況

(1) 令和3年度の事業概要

令和3年度は令和2年度に続き、新型コロナウイルス感染症の影響により、4月初から約1ヶ月間の臨時休館を余儀なくされ、その後も国や県の緊急事態宣言発令などに伴い臨時休館になるなど、通常の実業実施が難しい状況が断続的に続きました。このため、状況に応じた対応が必要となり、イベントの変更や中止・延期を行いながらも事業を実施し、8月7日には来館者1万人を達成することができました。

ここで、令和3年度に実施した主な事業・活動について以下に概要をまとめました。

展示・公開事業としては、「考古の展示室」と「歴史・民俗の展示室」の常設展示と、4回の企画展示を実施し、企画展示は、今年度のメインテーマを熊野三社に関するものとし、テーマに応じてそれぞれ80日前後の期間で開催しました。

学習・交流事業としては、主に3つの事業を実施しました。1つ目は「歴史スポットめぐり」で、当館のフィールド施設である市内の歴史スポットを、職員が解説しながらバスやウォーキングでめぐり、参加者の理解・関心を高める活動となりました。2つ目は11月に実施した資料館最大のイベントである「資料館まつり」で、歴史文化に因んだ催しや、民俗芸能団体等の活動を披露する場となりました。3つ目は各種講座・講演会の事業で、「名取の歴史講座」の開催(3回)や、講演会(1回)、出前講座への講師派遣などを実施しました。

体験学習事業としては、まが玉づくり体験、ミニ埴輪づくり体験、火おこし体験、タデアイの生葉染め体験、けしごむはんこでオリジナル宝印を作ろう、アンギン編みのミニ敷物づくり、拓本しおりづくり、脱穀&糲摺り体験を実施し、事前予約により実施したものと資料館まつりで随時実施したものの、依頼を受けて個別に実施したものを含め、23回実施しています。

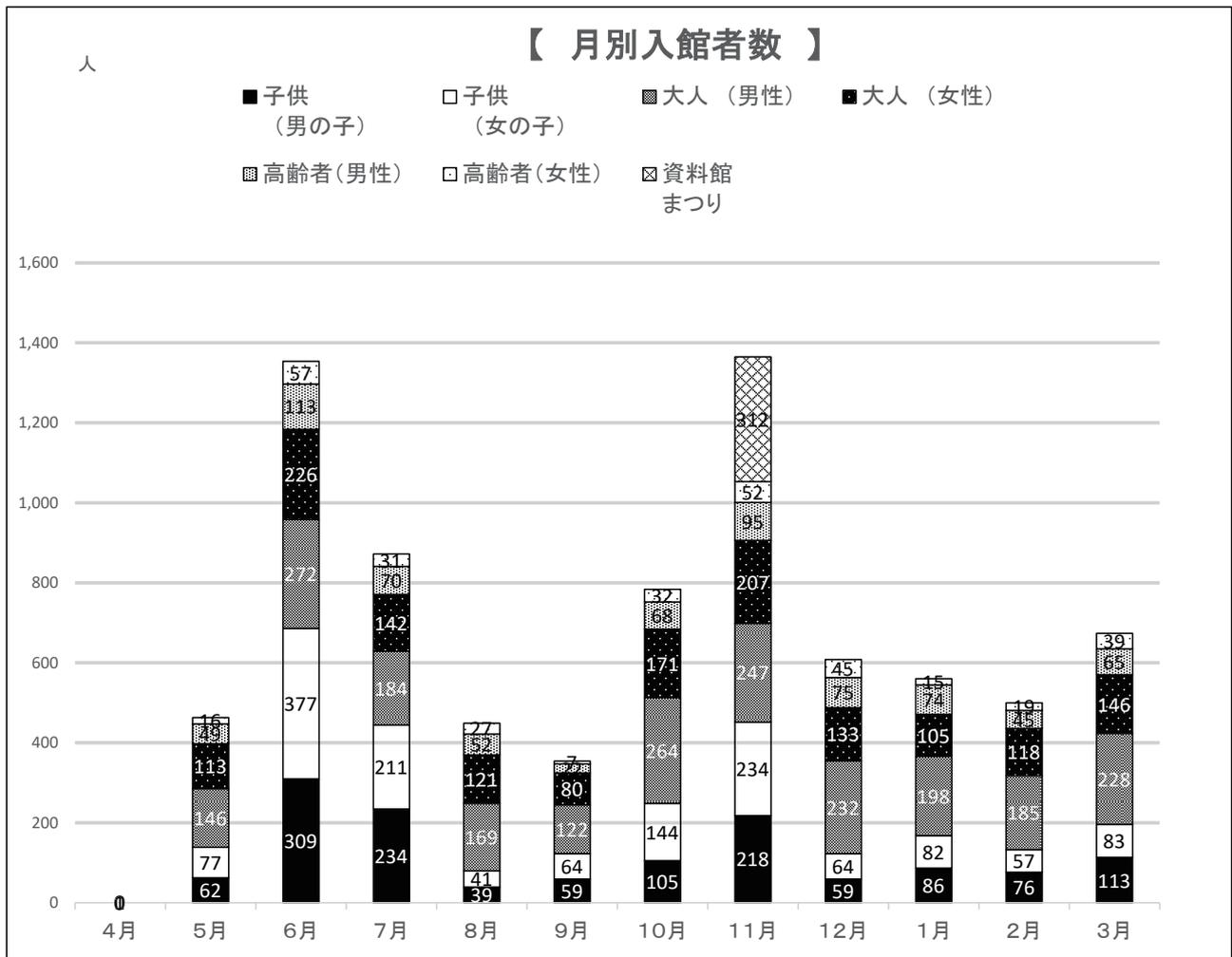
調査・研究事業は、体験学習メニューの充実を図るための検討や、まだ情報が少なく実態が判らない市内の遺跡等について、収蔵資料や新発見の資料などを整理して公開・活用するもので、成果は本年報に掲載しています。

なお、新型コロナウイルス感染症対策として、来館者の体調チェックや検温、手指消毒に加え、設備等の消毒などを随時実施しました。

(2) 利用状況

令和3年度の1年間における入館者数は、昨年度を上回る7,671人で、令和2年5月31日（日）のグランドオープンから令和4年3月末現在の総入館者数は延べ15,262人となっています。

月	子供 (男の子)	子供 (女の子)	大人 (男性)	大人 (女性)	高齢者 (男性)	高齢者 (女性)	外国人 (男性)	外国人 (女性)	資料館 まつり	来館者	日平均	日数	開館日
4月	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	30	0
5月	62	77	146	113	49	16	0	0		463	27	31	17
6月	309	377	272	226	113	57	0	0		1354	52	30	26
7月	234	211	184	142	70	31	0	0		872	32	31	27
8月	39	41	169	121	52	27	0	0		449	20	31	23
9月	59	64	122	80	22	7	0	0		354	24	30	15
10月	105	144	264	171	68	32	0	0		784	29	31	27
11月	218	234	247	207	95	52	0	0	312	1053	42	30	25
12月	59	64	232	133	75	45	0	0		608	25	31	24
1月	86	82	198	105	74	15	0	0		560	23	31	24
2月	76	57	185	118	45	19	0	0		500	21	28	24
3月	113	83	228	146	65	39	0	0		674	26	31	26
R2来館者	1,139	1,103	2,263	1,617	811	512	2	1	143	7,591	30	305	251
R3来館者	1,360	1,434	2,247	1,562	728	340	0	0	312	7,671	30	365	258
合計	2,499	2,537	4,510	3,179	1,539	852	2	1	455	15,262	30	670	509



(3) 令和4年度の主な事業計画

令和4年度に実施予定の、資料館が主催する主なソフト事業について、概略を以下に記載しています。ここで記載した事業の内容や、実施時期などについては、あくまでも現段階での計画であるため、今後の状況により、大きく変更となることや実施回数の増減が想定されることをご留意願います。

①展示・公開事業

1) 常設展示

観覧者にとって分かりやすい内容となるよう、補助パネルや解説シート設置などの工夫や、季節毎の室内装飾、代替品との展示替えなども検討しながら実施予定です。

2) 企画展示

令和4年度のメインテーマを「旧石器・縄文時代」とし、これについての展示を2回、その他の個別テーマに関する展示を2回、計4回の企画展示開催を想定しています。内容や期間、回数なども含め、状況に応じて柔軟に変更することを基本としています。

第8回企画展「名取の貝塚―海や潟湖と縄文人のくらし―」

4月10日(日)～6月26日(日):78日間

第9回企画展「織物の歴史とその道具」

7月10日(日)～9月25日(日):78日間

第10回企画展「名取の縄文ムラ―森や丘と縄文人のくらし―」

10月9日(日)～12月25日(日):78日間

第11回企画展「令和3年度 発掘調査報告展」

1月8日(日)～3月26日(日):78日間

②学習・交流事業

1) 歴史スポットめぐり

資料館開館当初から開催しているメジャーコースや、令和3年度から実施した「熊野三社歴史ウォーキング」、「古墳ウォーキング」に加え、増田周辺の文化財めぐりや、旧石器・縄文時代の遺跡をめぐる新たなコースを検討し、計7回の開催を予定しています。

古墳ウォーキング (4月頃): 雷神山古墳+飯野坂古墳群コース

第1回歴史スポットめぐり (5月頃): 旧石器・縄文コース

熊野三社歴史ウォーキング (5月頃): 熊野めぐりコース

増田ウォーキング (8月頃): 増田周辺の文化財コース

第2回歴史スポットめぐり (9月頃): メジャーコース

第3回歴史スポットめぐり (10月頃): メジャーコース

古墳ウォーキング (3月頃): 雷神山古墳+飯野坂古墳群コース

2) 第3回 資料館まつり

資料館最大のイベントである「資料館まつり」は11月頃の開催を予定しています。開催日については、「秋まつり」を含め、他の行事の日程なども勘案しながら決定する予定です。各イベント等の実施場所は、昨年同様、下記を基本に、内容の変更や充実を図りながらの実施を検討しています。

屋外メインステージ (民俗芸能披露2件、昔ばなし語り、吹奏楽演奏ほか)

展示室 (展示案内・解説)

体験学習室 (まが玉づくり、しおりづくり、缶バッジづくり、火おこし)

古墳ふれあい広場 (はに輪投げ)

物販 (ドリンク、雑貨など)

※カッコ内は第2回目の主な実施内容。

3) 歴史講座・講演会

歴史講座

名取の歴史や民俗、自然などを学ぶ講座を計4回開催する予定です。実施時期や内容については未確定ですが、主に企画展示の関連イベントとして、企画展示内容に関わる講座を実施する予定です。

第1回 歴史講座（4月頃） 13:30～15:00

第2回 歴史講座（7月頃） 13:30～15:00

第3回 歴史講座（10月頃） 13:30～15:00

第4回 歴史講座（1月頃） 13:30～15:00

講演会

令和4年度のメインテーマである「旧石器・縄文時代」などに関する講演会を、11月から3月頃に、外部講師を招いて開催する事を検討しています。

各種案内・出前講座

昨年度同様、随時の依頼によるものや、市の出前講座への申し込みによる講師派遣などを含め、資料館の展示解説や、市の主な文化財、歴史スポットなどの案内や説明を行います。実施にあたっては、出来るだけニーズに合わせてながら対応する予定です。

4) ボランティア研修講座

当資料館では、現在25名のボランティアの方々が活動しています。資料館の事業や活動の円滑な実施を図るとともに、資料館とボランティアの皆さんが連携をとりながら、より充実した活動を行い、利用者の満足度や利便性の向上につながるよう、新規ボランティアを対象とした展示解説や体験学習サポートのための研修講座を年5回実施する予定です。これは、既に活動しているボランティアのスキルアップ講座も兼ねており、このほか資料館主催の各種講座やイベントなどにも研修を兼ねて参加していただきながらの活動を予定しています。

5) 市内小学6年生 訪問学習

本格的に歴史の学習がはじまる小学校6学年を対象に、資料館での訪問学習を実施し、郷土の歴史や先人たちの暮らしについて学ぶ機会を提供します。具体的には、資料館が作成した学習ノートを活用した展示室での学習活動や、まが玉づくりなどの体験活動を組み合わせた活動を計画しています。実施にあたっては、各学校の要望に合わせてながら、柔軟に対応する予定です。また、スムーズに訪問学習を実施するため、移動手段の確保なども検討しています。

③体験学習事業

魅力ある体験メニューを用意し、来館者の体験活動のサポートなどを行います。

1) 体験学習・体験イベント

令和3年度に実施した体験学習メニューを基に、令和4年度以降も実施メニューを増やししながら、内容の充実を図る予定です。

まが玉づくり・缶バッジづくり・拓本しおりづくり・ミニ縄文土器づくり・ミニ埴輪づくり

タデアイの生葉染め・火おこし・けしごむはんこでオリジナル宝印をつくろう

アングイン編みのミニ敷物づくり・脱穀&粃摺り

2) 実施検討メニュー

今後も体験学習メニュー数を増やしたり、内容のブラッシュアップを図ったりしながら実施していく予定です。下記の内容に限らず、柔軟にメニューを取り入れながら実施していきます。

紙漉きによるハガキづくり・管玉づくり・石器の製作や使用体験

拓本体験（石碑）・繭の糸繰り体験

④調査研究事業

当資料館では、歴史や考古、民俗などをはじめとする多様な歴史文化の保存・活用を行っており、特に本市に関わるものについて、引き続き調査・研究を進める予定です。資料館が実施する学習交流や体験活動などを通じて、多くの方々から寄せられる情報なども参考にしながら、その成果の蓄積・継承や活用を行います。主な対象は、以下のものが想定されますが、具体的な内容については柔軟に実施する予定です。

- 名取の歴史・民俗に関する調査研究
- 体験メニューの開発に関する調査研究
- 資料館利用学習のプログラムに関する調査研究
- ボランティアスタッフとの協働調査研究
- 上記の研究成果をまとめた報告書の刊行

2. 開館1周年記念事業

令和3年5月31日、名取市歴史民俗資料館は開館1周年を迎えました。

開館1周年を記念し、下記の日程でイベントや講演会を実施しました。

【イベント1】熊野三社歴史ウォーキング

開館日時：令和3年5月22日（土）
9：00～12：00

【イベント2】講演会「奥州名取熊野三山の成立」

開催日時：令和3年5月30日（日）
13：30～15：00

講師：仙台市博物館 佐々木 徹氏



3. 来館者1万人達成式典

令和3年8月7日（土）、名取市歴史民俗資料館の来館者1万人達成式典が執り行われました。記念すべき1万人目の来館者となった松田さん親子へ、山田市長より花束が贈られ、鵜崎館長より記念品の贈呈が行われました。



4. 展示・公開

(1) 常設展示

約2万年前頃から受け継がれてきた多くの歴史文化の中から、特に名取市の歴史文化の特徴や魅力を物語る6つのテーマに絞って、写真・映像・解説などにより分かりやすく紹介しています。

展示室は「考古の展示室」と「歴史・民俗の展示室」の2つの展示室があります。

①オリエンテーションルーム

常設展示はテーマに絞った展示になっていることから、市の歴史文化の概要や大きな流れを把握しにくい恐れがあります。そこで入口脇にあるオリエンテーションルームでは、60インチのモニターの2つの映像を通じて、予め本市の歴史の流れや概要を見た上で常設展示などをご覧頂くことを意図したものです。2つの映像は、通史を紹介する「なとり歴史の旅」と市内の主な歴史スポットを上空から紹介する「なとりの歴史 空中散歩」という10分程度のもので、ボタンで選択して見ることができます。

②考古の展示室

雷神山古墳をはじめとする、旧石器時代から平安時代頃にかけての発掘調査の出土品や資料を中心に紹介しています。

入口正面には、導入部として自然環境と人々の暮らしの広がりを視覚的に見ることが出来る「考古資料からみた名取」のコーナーがあります。名取市の地形模型に現在の市の様子や、過去の海岸線と人々の暮らしの広がりを、大きく4つの時期に分けて、プロジェクションマッピングにより、海岸線などをはじめとする自然環境の変化と、それに応じて丘陵部から平野部へと拡大していく生活区域の変遷をイメージと音声で理解することが出来ます。

【テーマ1：愛島・高館の森や海辺の丘と縄文の暮らし】

市西部の丘陵や「名取が丘」がある丘陵で展開された、市の歴史の原点とも言える旧石器時代や縄文時代の暮らしに焦点をあてたものです。自然との共生の中で、生活の舞台として選ばれたことを物語る文化財を展示しています。コーナーの最後には、考古展示室が対象とする時代の年表があります。

- 主な内容：野田山遺跡、泉遺跡、今熊野遺跡、前野田東遺跡、宇賀崎貝塚、金剛寺貝塚



【テーマ2：雷神山古墳と花開いた古墳文化】

古墳文化繁栄のシンボルであり、当時は東北の中心であったことを物語る「雷神山古墳」のほか、多数の古墳、他の地域との交流を伝える出土品に焦点をあてたものです。また、稲作をはじめとする大陸文化の伝来により、その繁栄の基礎がつけられた弥生時代の文化財も含め展示しています。

- 主な内容：十三塚遺跡、原遺跡、今熊野遺跡、雷神山古墳、飯野坂古墳群、下増田飯塚古墳群



【テーマ3：名取郡の成立と実方中将】

8世紀(700年代)の初め頃の「名取郡」成立により、歴史の舞台に「名取」が登場します。名取郡には当時の陸奥国府が置かれるなど、それ以前と同様に政治・文化の中心地でした。丘陵部には多賀城へと続く東山道が整備され、平安時代の著名な歌人「藤原実方」の旧跡をはじめ、様々な暮らしの痕跡が残されており、平野部でも大きな集落が営まれました。

- 主な内容：清水遺跡、笠島廃寺跡、藤原実方の墓、道祖神社、前野田東遺跡、熊野堂横穴墓群



③歴史・民俗の展示室

熊野三社をはじめとする、平安時代以降の歴史や暮らしに関する資料をご紹介します。

【テーマ4：熊野三社と名取の老女】

平安後期に成立と伝わる熊野三社は、全国3,000か所以上ある熊野ゆかりの社寺の中で、紀州熊野三山と同じく、本宮・新宮・那智の3社を個別に祀り、位置関係なども似せるなど、全国的にも珍しい特徴を有し、多くの関連する文化財が伝えられています。その成立に深く関わる「名取老女」の伝承や旧跡にも焦点をあてた展示です。

モニターでは「見てみよう！熊野三社の伝説と芸能」があり、タッチパネルで見たい神楽などの映像を見ることが出来ます。その前面には昭和50年頃の熊野三社付近の様子を再現した模型で位置関係や立地環境が分かります。

- 主な内容：熊野本宮社、熊野神社（新宮社）、熊野那智神社、熊野新宮寺、大門山遺跡



【テーマ5：増田宿と洞口家・旧中沢家住宅】

仙台藩に属した江戸時代には、市中央の奥州街道沿いに増田宿の「まち」が、平野部には洞口家住宅などの水田・堀・いぐねに象徴される田園集落、西部の丘陵部や谷筋などには、鎮守・村堂・山林・池・墓地などで構成される、暮らしの原風景ともいべき素朴な集落が営まれました。それぞれの環境に応じて展開した暮らしに焦点をあてた展示です。

- 主な内容：館腰神社、洞口家住宅、衣笠の松、鶴見屋土蔵、旧中沢家住宅



【テーマ6：貞山運河と閑上】

名取川河口の港まち閑上は、仙台と外洋をつなぐ物資運搬や漁業・農業を生業とし、江戸時代には藩直轄の港として、「貞山運河」や名取川を通じた城下への材木・米の運搬などで賑わいました。明治には、増田・閑上の2つの「まち」を結ぶ新道が、大正末～昭和初期には、増東軌道が整備されました。この様な、海岸文化の拠点としての特色に焦点をあてた展示です。コーナー内には、歴史民俗の展示室の展示に関わる年表やマップもあります。

- 主な内容：貞山運河、増東軌道、閑上土手の松並、閑上大漁唄込み踊、日和山、津波碑



【名取のくらしの道具】

常設展示の6つのテーマのほか、弥生時代から人々の暮らしを支えてきた米作りをはじめ、かつては名取でも行われていた養蚕、宿場町などで使われていたと思われる生活の道具などを展示したコーナーを設けています。



(2) 企画展示

①第4回企画展「名取熊野三社と周辺の歴史文化遺産」

○展示内容：平安時代後期の成立以降、東北有数の熊野信仰の布教拠点となった名取熊野三社について、特にその活動が活発であった鎌倉時代から南北朝時代頃の歴史文化遺産に焦点をあて、三社の様子や周辺の人々の活動など、熊野神社の文化財や大門山遺跡、川上遺跡などの出土遺物とともに紹介しました。

○会期：4月10日（土）～6月27日（日）

○開催日数：79日間

○入館者：1,726人

○展示資料：熊野神社文書（熊野神社所蔵）、
新宮寺・大門山遺跡出土品など

○関連事業：講演会、熊野三社歴史ウォーキング、展示解説案内

○担当者名：鴫崎哲也

②第5回企画展「海辺の豪族の墓—経ノ塚古墳—」

○展示内容：度重なる削平により今は姿をとどめていない経ノ塚古墳から見つかった長持形組合石棺や鹿角製刀装具、国の重要文化財に指定されている家形埴輪や鎧形埴輪、円筒埴輪とともに、古墳の特徴、葬られた人物などをご紹介します。

○会期：7月11日（日）～9月26日（日）

○開催日数：78日間

○入館者：1,282人

○展示資料：埴輪破片（東北大学所蔵）

○関連事業：講座、ミニ埴輪づくり体験、展示解説案内

○担当者名：鈴木舞香、太田昭夫

③第6回企画展「名取熊野三社と周辺の歴史文化遺産2—中世後半～近世」

○展示内容：第4回企画展に続く「名取熊野三社と周辺の歴史文化遺産」のパート2として、南北朝期の争いを経て、名取郡が伊達氏の領地に組み込まれていった、室町時代頃から江戸時代頃にかけての熊野三社の様子や熊野信仰の地域への広がりなどについて、山城の出土品や熊野神社所蔵資料などとともにご紹介しました。

○会期：10月10日（日）～12月26日（日）

○開催日数：67日間

○入館者：2,240人

○展示資料：木造狛犬（熊野神社所蔵）、一宮八幡社の懸仏（榊原氏所蔵）
熊野神社・熊野本宮社の牛王宝印版木（両神社所蔵）など

○関連事業：講座、熊野三社歴史ウォーキング、展示解説案内

○担当者名：太田昭夫



④第7回企画展「令和2年度発掘調査報告展」

- 展示内容：令和2年度に実施した28件の発掘調査の中から、本発掘調査にて成果を得ることができた上余田遺跡、舞台上遺跡、下増田飯塚古墳群を紹介しました。
- 会期：1月9日（日）～3月27日（日）
- 開催日数：78日間
- 入館者：1,600人
- 展示資料：上余田遺跡・舞台上遺跡・下増田飯塚古墳群出土品など
- 関連事業：講座、拓本しおりづくり、展示解説案内
- 担当者名：庄子美祐、相澤清利



	企画展名	期間	入館者数
第1回	なとりの王が教える 名取の古墳	令和2年5月31日（日）～9月6日（日）	2,702
第2回	山岡古墳のお宝 一時里帰りした名取の至宝	令和2年9月19日（土）～12月20日（日）	2,818
第3回	令和元年度発掘調査報告展	令和3年1月9日（土）～3月28日（日）	1,690
第4回	名取熊野三社と周辺の歴史文化遺産	令和3年4月10日（土）～6月27日（日）	1,726
第5回	海辺の豪族の墓－経ノ塚古墳－	令和3年7月11日（日）～9月26日（日）	1,282
第6回	名取熊野三社と周辺の歴史文化遺産2－中世後半～近世	令和3年10月10日（日）～12月26日（日）	2,240
第7回	令和2年度発掘調査報告展	令和4年1月9日（日）～3月27日（日）	1,600

(3) 名取市図書館情報発信コーナー

多くの方に名取市の歴史・文化を知ってもらえるよう、名取市図書館の情報発信コーナーで、時代ごとにテーマを設けて展示・公開をしています。



5. 学習・交流活動

(1) 歴史スポットめぐり

①市内歴史スポットめぐり

市内歴史スポットめぐりは、資料館の展示と市内各所に点在する魅力あふれる歴史スポットを、職員の解説を聴きながらバスでめぐるとツアーです。今年度は、6月・10月・3月に2回ずつ、計6回のスポットめぐりを実施しました。市内を代表する歴史スポットをめぐると2つのコースを設定し、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、毎回の募集人数を20名に限定し、各回バス2台を借りて実施しました。今後も、新しいコースを増やししながら、継続的に取り組んで行く予定です。



【おすすめコース①】

市内の主要な歴史文化スポットの中から、市西部の高館や愛島地区の丘陵部から、中央の増田地区などを中心に回るコースで、熊野三社や藤原実方の墓などのほか、雷神山古墳や旧中沢家・洞口家住宅をめぐるとコースです。

- 熊野那智神社→熊野本宮社→熊野神社（新宮社）→藤原実方の墓→十三塚遺跡→旧中沢家住宅→雷神山古墳→衣笠の松→洞口家住宅

【おすすめコース②】

市内の主要な歴史文化スポットの中から、市中央部の増田や東部の下増田・閑上地区を中心に回るコースで、下増田飯塚古墳群や、閑上の日和山、閑上土手の松並などのほか、雷神山古墳や旧中沢家・洞口家住宅をめぐるコースです。

●十三塚遺跡・旧中沢家住宅→雷神山古墳→洞口家住宅→下増田飯塚古墳群→日和山・貞山運河→閑上土手の松並

1) 第1回歴史スポットめぐり

日 時：6月12日(土) 9:00～15:00 参加者：21人 内容：おすすめコース①

日 時：6月13日(日) 9:00～15:00 参加者：15人 内容：おすすめコース②

2) 第2回歴史スポットめぐり

日 時：10月16日(土) 9:00～15:00 参加者：16人 内容：おすすめコース①

日 時：10月17日(日) 9:00～15:00 参加者：14人 内容：おすすめコース②

3) 第3回歴史スポットめぐり

日 時：3月20日(日) 9:00～15:00 参加者：10人 内容：おすすめコース①

日 時：3月27日(日) 9:00～15:00 参加者：24人 内容：おすすめコース②

②熊野三社歴史ウォーキング

熊野三社歴史ウォーキングは、資料館開館1周年記念イベントとして初めて開催されたもので、職員の解説を聴きながら、熊野那智神社・熊野本宮社・熊野神社をめぐるウォーキングイベントです。今年度は、5月と10月の計2回開催しました。10月の熊野三社歴史ウォーキングでは、スマートフォンを活用して歩行距離を競い合う、オクトーバー・ラン&ウォーク2021と合同で開催しました。

1) 日時：5月22日(土) 8:45～12:00 参加者：19人

2) 日時：10月10日(日) 8:45～12:00 参加者：19人



③なとり古墳ウォーキング

なとり古墳ウォーキングは、国指定史跡である雷神山古墳と飯野坂古墳群を、資料館職員の解説を聴きながら歩いてめぐるウォーキングイベントです。

日 時：3月13日(日) 9:00～12:30

参加者：23人



④旧中沢家住宅 屋根葺き替え工事見学会

今年度は、名取市の国指定重要文化財の旧中沢家住宅で、平成9年度以来約20年ぶりとなる屋根の全面葺き替え工事が行われました。これに伴い、滅多に見ることのできない茅葺屋根の葺き替え工事の見学会を行いました。安全管理を行ったうえで見学を行うため、見学時間を5回に分け、各回10名の募集のもと、安全に配慮しながら、資料館職員の解説とともに見学を行いました。

日時：6月5日（日）

- ① 10：00～10：30 ② 10：45～11：15 ③ 13：30～14：00
 ④ 14：15～14：45 ⑤ 15：00～15：30

参加者：49人

(2) 資料館まつり

当資料館が主催する1年で最大のイベントである資料館まつりの第2回目を、11月13日（土）に開催しました。昨年に続き、当日は秋晴れの天候に恵まれ、家族連れなど延べ318名の方々に来館頂きました。

会場では、名取の歴史のシンボルでもある雷神山古墳をイメージした「古墳クッキー」がもらえるスタンプラリーなどが行われ、古墳広場の前では、東日本大震災後に当時図書館として利用されていた建物建設をご支援頂いたご縁から、カナダの紹介ブースも併せて設けられました。

日時：11月13日（土） 10：00～14：00 参加者：318人

【メインステージ】

敷地内の駐車場に設けられたメインステージでは、「エフェムなとり」のMCのもと、午前中には、下増田麦搗き踊保存会の皆さんによる、市指定無形民俗文化財「下増田麦搗き踊」や、熊野堂神楽保存会の方々による、宮城県指定の無形民俗文化財「熊野堂神楽」の披露のほか、資料館ビンゴや資料館クイズなどの企画が行われました。

また、午後からは、なとり昔ばなし語りの会の皆さんによる、味わい深いなとりの昔ばなしの披露や、増田中学校吹奏楽部の皆さんによる迫力ある生演奏などを披露して頂きました。

【古墳ふれあいひろば】

古墳ふれあい広場では「はに輪投げ」が行われました。この企画は、名取の古墳からも見つかっている円筒埴輪のレプリカを的にした輪投げです。昨年度は難易度が高く、0本という方もいましたが、今年度はやや難易度が下がったため、埴輪に入れることができる回数が増え、子供たちだけではなく大人まで楽しめる企画となりました。昼前には「はに輪投げ大会」が開催され、5つある円筒埴輪のレプリカにそれぞれ得点を設定した上で、これに投げた距離を乗算し、5回投げ終えた時点での合計点数を競い合うというものです。33名




の方が大会に参加し、平均点数 205 点、最高点数 600 点を記録して終了しました。

【体験イベント】

体験学習室内では、まが玉づくり、缶バッジづくり、しおりづくりを行いました。屋外では、今年度より新たに火おこし体験を行いました。主に資料館ボランティアのみなさんが指導や補助を行い、来館者の方々の活動をサポートしました。

【その他】資料館スタンプラリー、物販コーナー

受付前には、心の病で障がいをお持ちの方への就労支援を行っている名取市友愛作業所にご協力頂き、物販コーナーを設置しました。



(3) 歴史講座

①第1回歴史講座「中世前半の名取熊野三社とその周辺」

内容：第4回企画展の関連イベントとして実施を予定していた講座です。新型コロナウイルス感染症感染拡大防止に係る緊急事態宣言の発令により、資料館の臨時休館が余儀なくされ、この講座は中止となりました。

日時：4月29日（木・祝）13：30～15：00 募集定員：20人 講師：鵜崎哲也

②第2回歴史講座「経ノ塚古墳ものがたり～海辺の豪族の墓のお話～」

内容：第5回企画展の関連イベントとして実施した講座です。

日時：7月22日（木・祝）13：30～15：00 参加者：27人 講師：鈴木舞香

③第3回歴史講座「中世後半～近世の名取熊野三社とその周辺」

内容：第6回企画展の関連イベントとして実施した講座です。

日時：10月30日（土）13：30～15：00 参加者：20人 講師：太田昭夫

④第4回歴史講座「最近の発掘調査成果」

内容：第7回企画展の関連イベントとして実施した講座です。

日時：1月30日（日）13：30～15：00 参加者：18人 講師：鈴木舞香、庄子美祐

(4) 講演会「奥州名取熊野三山の成立」

資料館の開館1周年記念イベントとして開催した講演会です。古くから熊野信仰の霊場として知られる名取熊野三社は、紀州熊野三山と同様に、本宮・新宮・那智がそれぞれ独立した境内をもつ特徴があります。そんな名取熊野三社について、いつから三社が成立したのか、それぞれの関係や活動がどのようなものであったのか、最近の研究などを踏まえながら、仙台市博物館学芸員の佐々木徹氏にお話しいただきました。

日時：5月30日（日）13：30～15：00

参加者 26人

講師：佐々木 徹氏（仙台市博物館学芸員）

会場：体験学習室



(5) 各種案内・マナビ出前講座・展示解説案内

①各種案内等

団体への施設案内のほか、新聞・雑誌・ラジオなどの各種媒体に関する取材、歴史スポットでの案内など、16件にのぼる依頼に応じて各種案内を行いました。

団体名	日時		人数	講座名/内容	対象
名取市子どもの心のケアハウス	6月15日	10:20~11:20	8	展示見学	小・中学生 一般
名取が丘公民館	6月15日	10:00~11:30	18	「ぶらり なとり史」/講座・遺跡めぐり	一般
	6月29日	9:00~12:00			
	7月13日	10:00~11:30			
相互台公民館	9月15日	9:00~12:00	20	「なとりの歴史講座」/遺跡めぐり	一般
名取市郷土史研究会	7月15日	13:30~15:00	25	展示見学	一般
豊齢学園OB歴史めぐりの会	7月21日	9:50~12:15	20	展示見学	一般
名取市企画部名取の魅力創生課	8月3日	10:45~11:45	2	施設見学・職員へのインタビュー	一般
名取市教育委員会 学校教育課	8月4日	10:15~11:15	15	初任者研修 展示見学・まが玉づくり	一般
名取市校長会	8月25日	8:30~12:30	19	展示見学	一般
民生委員児童委員	9月14日	13:30~14:00	20	「生き活き健康体操」/講座	一般
増田西公民館	9月30日	10:00~12:00	19	「男の生活人間塾」/縄文土器づくり	一般
仙台教育事務所管内 社会教育主事研究協議会	10月1日	15:10~16:00	12	展示見学	一般
(公財) 仙台市市民文化事業団 仙台市富沢遺跡保存会	10月27日	10:00~11:00	7	展示見学	一般
名取市副校長教頭会	10月28日	11:00~11:30	25	展示見学	一般
名取が丘やってみ隊	11月6日	9:30~11:30	20	「古墳巡り in 名取が丘」/遺跡めぐり	小・中学生 一般
おいで歩美会	12月1日	10:00~12:00	10	展示見学	一般
宮城スリパチ学会	12月19日	10:30~12:00	20	展示見学	一般

②マナビ出前講座

生涯学習推進事業として市で実施しているマナビ講師派遣事業「出前講座」からの依頼に応じて、資料館職員の講師派遣を1件行いました。

依頼団体	日時		人数	講座名/内容	構成
相互台公民館	8月20日	10:00~11:30	20	「なとりの歴史講座」/講座	一般

③展示解説案内

企画展の実施に合わせて、資料館の職員が常設展示および企画展示の内容や見どころを案内したもので、当日集まった方を対象に行っています。実施日は、4月17日(土)・18日(日)、7月17日(土)・24日(土)、10月23日(土)・24日(日)、1月15日(土)・22日(土)で計8回です。1回あたりの説明時間は約1時間の予定ですが、参加者の方々からの質問等があるときには90分近くに及ぶこともあります。

(6) ボランティア

開館に先立ち、平成30年度からボランティアの募集を行い、現在、25名のボランティアの方々資料館ボランティアとして活動しています。10月には、名取市歴史民俗資料館ボランティア会の設立総会が開催され、ボランティア会の愛称が「れきみんの会」に決定しました。令和4年度にも新規ボランティアの募集を行い、引き続きボランティアの育成のための研修会の実施や、ボランティア会主催事業のサポートを行っていく予定です。

令和3年度に実施した新規ボランティアを対象とした研修講座は以下のとおりです。

	日時		内容	
第1回	7月26日	13:30~15:00	オリエンテーション	顔合わせ・資料館及びボランティア活動の概要説明
第2回	8月16日	13:30~14:30	展示解説実習	職員による考古の展示室解説案内
第3回	10月11日	13:30~14:30	展示解説実習	職員による歴史・民俗の展示室解説案内
第4回	12月13日	9:30~16:00	現地研修	名取市内の文化財をバスでめぐる (熊野那智神社・熊野神社・名取大塚山古墳・ 賽ノ窪古墳群・雷神山古墳・飯野坂古墳群)
第5回	2月14日	13:30~15:30	体験学習実習	まが玉づくり体験受講

(7) 市内小学6年生の訪問学習

歴史の学習が始まる小学6年生を対象として、資料館での展示見学やまが玉づくり体験を行う訪問学習を実施しています。令和3年度から訪問学習を実施し、市内11校のうち10校の小学6年生(延805人)が資料館を訪れ、歴史的な体験活動や郷土の歴史文化に触れる活動を行っています。

学校名	日時		人数	内容
増田小学校	6月2日	13:30~15:00	27	展示見学
	6月3日	13:30~15:00	36	展示見学
	6月9日	13:30~15:00	37	展示見学
	6月10日	9:30~10:30	37	展示見学
下増田小学校	6月8日	9:15~15:20	68	展示見学・まが玉づくり
	6月11日	9:15~15:20	65	展示見学・まが玉づくり
館腰小学校	7月13日	9:15~11:45	27	展示見学・まが玉づくり
	7月14日	9:15~11:45	33	展示見学・まが玉づくり
愛島小学校	7月6日	9:00~11:30	37	展示見学・まが玉づくり
	7月7日	9:00~11:30	36	展示見学・まが玉づくり
	7月8日	9:00~11:30	36	展示見学・まが玉づくり
	7月9日	9:00~11:30	35	展示見学・まが玉づくり
高館小学校	6月16日	10:00~12:00	14	展示見学・まが玉づくり
不二が丘小学校	7月1日	9:50~11:50	26	展示見学・まが玉づくり
	7月2日	9:50~11:50	28	展示見学・まが玉づくり
増田西小学校	6月22日	9:30~11:45	31	展示見学・まが玉づくり
	6月23日	9:30~11:45	30	展示見学・まが玉づくり
	6月29日	9:30~11:45	30	展示見学・まが玉づくり
	6月30日	9:30~11:45	30	展示見学・まが玉づくり
ゆりが丘小学校	7月15日	10:00~11:00	33	展示見学
	7月16日	10:00~11:00	34	展示見学
相互台小学校	6月24日	9:00~11:00	30	展示見学・まが玉づくり
	6月25日	9:00~11:00	31	展示見学・まが玉づくり
那智が丘小学校	6月17日	10:00~12:00	41	展示見学・まが玉づくり
関上小中学校				新型コロナウイルス感染症に伴う資料館臨時休業により未実施

6. 体験学習活動

資料館主催の事業として参加者を募集し行った体験型のイベントです。オープン当初から行っているまが玉づくりに加え、様々な体験メニューを増やしながらか実施しています。

①まが玉づくり

名前の由来や名取で出土したまが玉について学びながら、滑石を使って自分だけのオリジナルまが玉を作る体験です。



日時		人数
6月19日	9:30~11:30	20
9月25日	13:30~15:30	16
11月7日	13:30~15:30	11
12月12日	13:30~15:30	16
2月20日	13:30~15:30	29
3月6日	13:30~15:30	15

②ミニ埴輪づくり体験

資料館で展示している埴輪の見学を行って埴輪について学びながら、高さ15cm程のオリジナルミニ埴輪を作る体験です。



日時		人数
7月23日	13:30~15:30	16
1月16日	13:30~15:30	19
2月27日	13:30~15:30	18

③火おこし体験

舞切り式火おこしを体験しながら、自力での火おこしに挑戦する体験です。



日時		人数
7月31日	13:30~14:30	33
11月27日	13:30~14:30	8

④タデアイの生葉染め体験

藍染めの染料になるタデアイという植物をつかって、10cm四方のコースターに模様をつけるタデアイの生葉染め体験です。染めと洗いの全2回にわたる体験となりました。



日時		人数
8月7・21日	13:30~14:30	18

⑤けしごむはんこでオリジナル宝印をつくる

熊野三社の牛王宝印に使われるカラス文字のはんこをけしごむで作製し、オリジナル宝印を作る体験です。



日時		人数
11月20日	13:30~15:00	7
12月26日	13:30~15:00	5

⑥アンギン編みでミニ敷物づくり

縄文時代から伝わるアンギン編みという方法で、毛糸でできたミニサイズの敷物(10cm四方)をつくる体験です。



日時		人数
12月18日	13:30~15:30	9
2月12日	9:30~11:30	7
	13:30~15:30	3

⑦拓本しおりづくり体験

土器の模様を写し取る拓本という方法を使ったオリジナルしおりづくり体験です。



	日時	人数
1月23日	10:00~11:00	6
	13:30~14:30	6

⑧脱穀&粃摺り体験

稲穂をお米にする作業である脱穀と粃摺りを、古代米と民俗資料などを使って学ぶ体験です。制限時間内に粃摺りしたお米の量を競う「すりりんピック」も開催しました。



	日時	人数
2月6日	13:30~15:00	13

7. 調査・研究活動

今後の体験学習メニューの候補として、タデアイの生葉染め・藍染めを取り入れたオリジナルグッズの製作や、牛乳パックを用いた紙漉きを取り入れたハガキの製作、土笛・土偶づくりなど、幾つかのものについて情報収集と試作を実施したものがああります。

また、文化財係と連携して、文化財資料の整理・資料化作業を行い、その成果をIV章調査・研究報告に掲載しています。

8. 資料管理・利用

(1) 収蔵資料利用

令和3年度の収蔵資料利用としては、市や資料館のHP、刊行物等に掲載している写真や図版資料の書籍や冊子への転載など8件の利用申請がありました。

また、当館の企画展示等の実施にあたっては、仙台市、東北大学、東京国立博物館、熊野神社、熊野本宮社、榊原紘氏へ写真や図版資料の利用申請および資料借用申請を行いました。

(2) 資料調査

令和3年度では、当館の収蔵資料の中から考古資料についての資料調査や閲覧・写真撮影などの依頼が3件ありました。市内から出土している石製模造品や笠島廃寺跡や市内の遺跡から出土している瓦、十三塚遺跡出土の弥生土器など、いずれも個人の調査・研究を目的とした調査です。今後も、収蔵資料などの情報発信に努めながら、より多くの利用が図られ、新たな知見の発見につながることも期待されます。

(3) 寄贈・寄託

資料館の開館後、民俗資料を中心とした資料の寄贈の問い合わせなどが寄せられており、資料館の職員が、収蔵資料の状況などに基づき手続きを行い、寄贈頂いたものがあります。令和3年度には合わせて9件の資料を寄贈いただきました。寄贈いただいた資料は、古文書類、古書類、せり靴、半鐘、北野窯跡出土須恵器、賞状や修了証書、書簡、手回し水車、種まき機、鉄砲風呂、稲こき機などがあり、寄贈いただいた資料については、収蔵資料などへの登録を行い、今後の展示公開や体験、調査・研究活動などへ活用していく予定です。



(4) 収蔵資料整理

市が所蔵している資料のうち、考古資料約13,000点についてはデータベース化が終了し、令和2年度からHPでの公開を開始しています。令和3年度については、新たにデータ化した考古資料280点や、公開

済みのデータに追加する写真画像などを整理し、順次公開作業を行っています。

民俗資料については、個体毎の番号を再符号し、写真撮影を行ったデータを令和3年当初より公開しており、件数は2,000件弱に上るが、写真画像のないものもあるため、引き続き写真撮影と資料の詳細な用途や使用年代などの追跡調査を行いました。また、令和2・3年度に寄贈を受けた資料についても、HP公開に向け、附番・調査などを含めたデータ化を進めています。

(5) 燻蒸・調査

展示室をはじめとする当資料館の建物は、東日本大震災の後に図書館として建築された木造建築を改修したものであり、気密性や遮蔽性など、専用施設として計画された建物に比して相対的に低い状況です。また、その環境が年間の気候変動などでどのように推移して行くのか、施設利用開始後の実態を調査・分析し、その結果に基づいて対応していく必要があります。また、展示物などに対して加害の恐れがある害虫や細菌類などの生息調査についても同様に必要で、一定の基準以下となるよう燻蒸処理を行う必要があります。専門業者へ業務委託を行い環境調査や収蔵・展示資料の燻蒸処理を行いました。

環境調査では、展示室のほか文化財収蔵館1階も対象区域に含め、8月と1月から2月にかけての計2回、それぞれ約1ヶ月間実施しました。調査内容には①昆虫生息調査、②浮遊菌調査、③塵埃調査（温湿度・炭酸ガス・照度含）があり、その結果、①では文化財収蔵館から、木製品や書籍、乾燥植物質等を加害する文化財害虫であるジンサンシバンムシや書籍や動植物標本、段ボール箱等に生えたカビを食すチャタテムシ類があり、主に文化財収蔵館での文化財害虫の捕獲が目立ちました。文化財害虫に共通する対策として、定期的な目視点検と清掃が推奨されています。②浮遊菌調査では、文化財収蔵館の数値が基準値を上回り、施設自体が経年劣化などにより外気の影響を受けやすい環境にあることを示し、梅雨時期から夏にかけて除湿器を活用するなど、高湿環境への対策実施が推奨されています。③の塵埃調査では、特に異常は認められませんでした。

展示収蔵資料の燻蒸作業は、施設の特徴から建物自体の密閉が困難であることから、体験学習室の内部に骨組みによる幅4m×奥行5m×高さ1mの密閉空間を作り出し、その内部に燻蒸対象となる展示・収蔵資料を入れ込み、公益財団法人文化財虫菌害研究所の認定薬剤をガス化・充填して行う包み込み燻蒸処理により実施しました。今回燻蒸処理を行った主な資料には、歴史・民俗の展示室の常設展示資料の内、古文書資料や民俗資料、文化財収蔵館で収蔵している古文書や書籍、借用などの件数の多い民具資料などを優先的に行いました。実施期間は約1週間で、この間、一時展示をとりやめたものがあります。



9. 刊行物

資料館が作成した刊行物には、この『名取市歴史民俗資料館年報 ー令和3年度ー』のほか、『名取市歴史民俗資料館年報 ー令和2年度ー』、資料館の施設案内パンフレット（両面3つ折り・日本語版および英語版有）があり、来館者や図書館をはじめとする市の関係施設などへ設置して各施設の利用者へ配布を行っています。

Ⅲ. 資料

1. 施設概要

平成30年12月末まで、名取市図書館として利用されてきた当館の土地や建物には、東日本大震災の後に、カナダ連邦政府、ブリティッシュコロンビア州やアルバータ州、カナダウッド、(公財)日本ユニセフ協会や(公財)図書館振興財団をはじめとする支援で建てられた施設が多くあります。

当資料館の整備においては、これらの施設を出来るだけ活かしながら、市の歴史文化の保存・活用の拠点となる施設として整備しました。当館の敷地(3,871㎡)内には、(1)～(4)の4つの建物のほか駐車場・駐輪場、古墳ふれあいひろば、親子ひろばがあります。

(1) 考古の展示室

オリエンテーションルーム、考古の展示室、収蔵庫、トイレ、受付・事務室があります。

木造平屋建て(238㎡)。壁などの建材には、カナダツガ材が使用され、木の温もりを感じることができる建物です。平成25年のカナダー東北復興プロジェクトによる支援で建築された建物を活用しています。

(2) 歴史・民俗の展示室

歴史・民俗の展示室、企画展示室、情報検索ブース、トイレがあります。

木造平屋建て(157㎡)の建築で、壁などの建材には杉材が用いられ、木の温もりを感じることができる建物です。平成23年10月に公益財団法人日本ユニセフ協会の支援で建築した建物を活用しています。

(3) 体験学習室

体験学習室と収納室があります。鉄骨造平屋のプレハブ(188㎡)の建築です。室内では各種講座や講演会、まが玉づくりや、土器づくりなどの体験イベントなどを行うことができ水道も使用できます。テーブル・椅子を並べた場合、およそ30人での使用ができ、椅子だけを並べた場合には、約50人での使用が可能です。

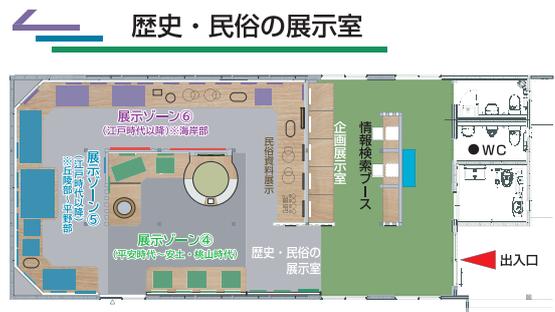
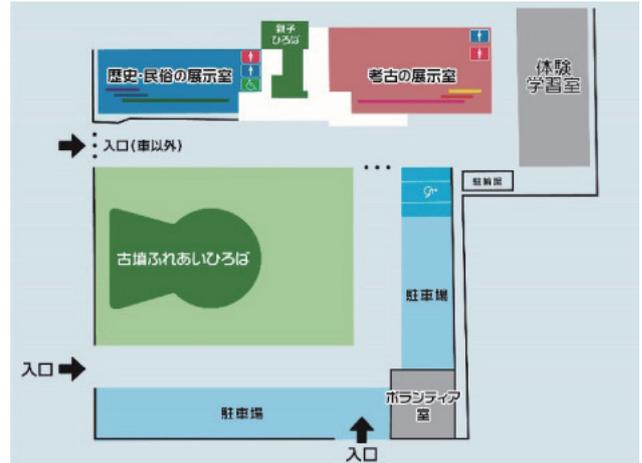
(4) ボランティア室

資料館で活躍するボランティアさんの活動などを行う施設です。

鉄骨造平屋プレハブ(66㎡)の建築です。平成23年10月に公益財団法人図書館振興財団の支援で建築した建物を移設し活用しています。

(5) 古墳ふれあいひろば

雷神山古墳のおよそ1/10サイズの前円墳をモチーフとした盛土や遊具がある芝生の広場です。親子で遊びながら自然に古墳の形をイメージできる広場です。



(6) 親子ひろば

「考古の展示室」の建物と「歴史・民俗の展示室」の建物の間にある屋外スペースです。「考古の展示室」入口脇のウッドデッキやベンチと併せ、小さなお子様と親子でくつろげる人工芝敷きの空間です。幼児用の遊具があります。

(7) 駐車場・駐輪場

普通車 22 台（ハンディキャップ専用含む）の駐車が可能です。バスの駐車は「考古の展示室」および「歴史・民俗の展示室」の裏側への駐車可能です。

駐輪場 10 台（屋根付き）の駐輪が可能です。

2. 組織・職員体制

(組織)

名取市教育委員会 — 文化・スポーツ課 — 名取市歴史民俗資料館
(文化財係)

(体制)

館長 — 主査 2 — 主事 3 — 会計年度任用職員 2

館長	鵜崎 哲也
主査	遠藤 裕
主査	大友 透
主事	大場 千夏
主事	鈴木 舞香
主事	庄子 美祐
会計年度任用職員	太田 昭夫
会計年度任用職員	安孫子 礼美

※ 館長、主査 1 名、主事 3 名は文化財係兼務、主査 1 名は市史編さん準備室兼務

3. 予算

項目	予算額	備考
維持管理費	10,800,000円	職員人件費除
事業活動費	7,200,000円	

4. 条例・規則

○名取市歴史民俗資料館条例

令和元年12月27日
名取市条例第24号

(趣旨)

第1条 この条例は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律(昭和31年法律第162号)第30条及び地方自治法(昭和22年法律第67号)第244条の2第1項の規定に基づき、名取市歴史民俗資料館(以下「資料館」という。)の設置及び管理に関し必要な事項を定めるものとする。

(設置)

第2条 考古資料、歴史資料、民俗資料、郷土資料、埋蔵文化財等の保存及び活用を行うことにより、市民の文化の向上に資するため、資料館を設置する。

(名称及び位置)

第3条 資料館の名称及び位置は、次のとおりとする。

名称	位置
名取市歴史民俗資料館	名取市増田一丁目7番37号

(業務)

第4条 資料館において、次に掲げる業務を行う。

- (1) 考古資料、歴史資料、民俗資料及び郷土資料(以下「考古資料等」という。)の収集、整理及び保管に関すること。
- (2) 考古資料等の調査及び研究に関すること。
- (3) 考古資料等の展示、利用及び普及啓発に関すること。
- (4) 埋蔵文化財に関する資料の収集、整理及び保管に関すること。
- (5) 埋蔵文化財の発掘、保全、調査及び研究に関すること。
- (6) 埋蔵文化財に関する資料の展示、利用及び普及啓発に関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、資料館の設置の目的を達成するために必要な業務に関すること。

(職員)

第5条 資料館に、館長その他必要な職員を置く。

(観覧料)

第6条 資料館が展示する資料の観覧料は、無料とする。

(委任)

第7条 この条例の施行に関し必要な事項は、規則で定める。

附 則

この条例は、公布の日から起算して6月を超えない範囲内において規則で定める日から施行する。

(令和2年教委規則第1号で令和2年4月26日から施行)

○名取市歴史民俗資料館条例施行規則

令和2年3月18日
名取市教育委員会規則第2号

(趣旨)

第1条 この規則は、名取市歴史民俗資料館条例(令和元年名取市条例第24号。以下「条例」という。)第7条の規定に基づき、条例の施行に関し必要な事項を定めるものとする。

(開館時間)

第2条 名取市歴史民俗資料館(以下「資料館」という。)の開館時間は、午前9時から午後5時までとする。ただし、教育委員会が特に必要があると認めるときは、開館時間を変更することができる。

(休館日)

第3条 資料館の休館日は、次のとおりとする。ただし、教育委員会は、特に必要があると認めるときは、休館日を変更し、又は別に休館日を定めることができる。

(1) 月曜日。ただし、月曜日が国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日に当たるときは、その日後においてその日に最も近い当該休日でない日

(2) 12月29日から翌年1月3日までの日

(入館者の遵守事項)

第4条 入館者は、次に掲げる事項を遵守しなければならない。

- (1) 展示物に触れないこと及び展示室でインク、墨汁等を使用しないこと。
- (2) 許可を得ないで展示物又は資料を模写し、又は撮影しないこと。
- (3) 他の入館者に迷惑を及ぼす行為をしないこと。
- (4) 前3号に掲げるもののほか、係員の指示に従うこと。

(入館の制限等)

第5条 教育委員会は、次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、資料館への入館を拒否し、又は退館を命ずることができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を害するおそれがあるとき。
- (2) 施設、設備器具又は展示物を損傷するおそれがあるとき。
- (3) 前2号に掲げる場合のほか、資料館の管理に支障を及ぼすおそれがあるとき。

(寄贈等)

第6条 資料館に資料を寄贈し、又は寄託しようとする者は、教育委員会に申し出なければならない。

(所蔵資料の貸出し)

第7条 資料館に所蔵されている資料(以下この条及び次条第2項において「所蔵資料」という。)の貸出しは、行わないものとする。ただし、博物館、美術館、図書館、学校その他教育委員会が適当と認める施設において所蔵資料を展示し、又は学術上の研究、学習等に用いる場合は、この限りでない。

2 前項ただし書の規定により所蔵資料の貸出しを受けようとするものは、所蔵資料貸出承認申請書を教育委員会に提出し、その承認を受けなければならない。この場合において、貸出しを受ける所蔵資料が寄託物であるときは、寄託者の承諾書を併せて提出しなければならない。

3 第1項ただし書に規定する場合における所蔵資料の貸出期間は、60日以内とする。ただし、教育委員会が特に必要があると認めるときは、この限りでない。

(損傷等の届出)

第8条 資料館の施設、設備器具、展示物等を損傷し、又は亡失させた者は、直ちに係員に届け出て、その指示に従わなければならない。

2 前項の規定は、所蔵資料(前条第2項の承認を受けることにより貸し出されたものに限る。)を損傷し、又は亡失させた者について準用する。

(委任)

第9条 この規則に定めるもののほか、必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、条例の施行の日から施行する。

5. 沿革

平成 29 年 12 月	(仮称) 名取市歴民民俗資料館 基本計画策定
平成 30 年 3 月	(仮称) 名取市歴民民俗資料館 基本設計
平成 31 年 3 月	(仮称) 名取市歴民民俗資料館 実施設計
令和 元年 7 月	(仮称) 名取市歴民民俗資料館整備工事着手 (竣工 令和 2 年 5 月 15 日)
令和 2 年 2 月	名取市歴史民俗資料館条例制定
令和 2 年 2 月	名取市歴史民俗資料館条例施行規則制定
令和 2 年 5 月	名取市歴史民俗資料館開館 (31 日)
令和 3 年 8 月	来館者 1 万人達成 (7 日)
令和 3 年 10 月	ボランティア会「れきみんの会」設立 (11 日)

IV. 調査・研究報告

名取市十三塚・飯野坂遺跡出土の勾玉・管玉について

相澤 清利（名取市教育委員会文化・スポーツ課）

飯塚 義之（中央研究院地球科学研究所
金沢大学古代文明・文化資源学研究所）

1. はじめに

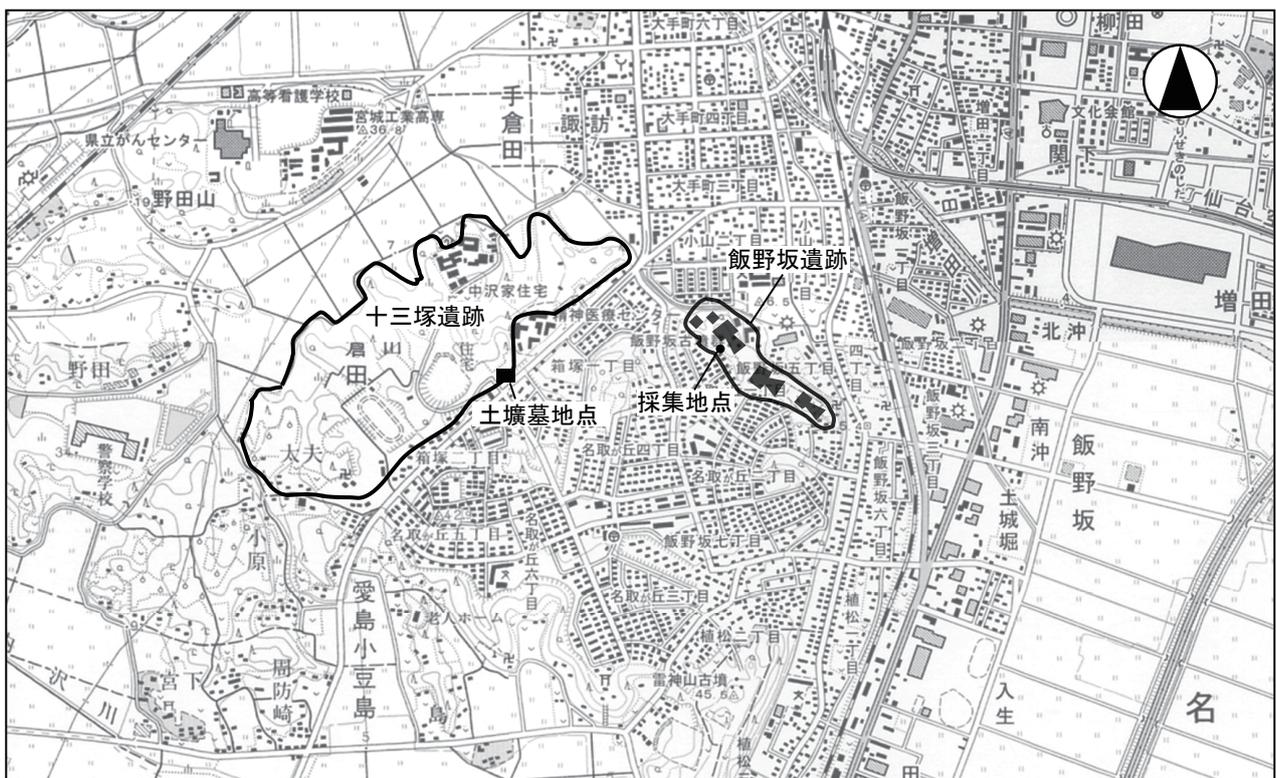
今回報告する十三塚遺跡の勾玉は、硬質で縞目をなす緑白色の美しい石で、一見してヒスイのようでもあり、在地のものではないように見受けられた。飯野坂遺跡のものは、未成品であることから、石材入手後在地で製作していたことを示す好資料である。いずれの資料も石質や原産地の究明が名取の弥生時代史に欠かせないものと考えられた。そのような折り、報告者の一人、飯塚が蛍光X線分析による縄文時代の石器石材調査で名取市を訪れる機会があり、石材分析を行った。ここに石材同定結果とともに改めて玉類の概要について紹介し、若干の考察を試みることにした。

2. 遺跡と調査の概要

(1) 十三塚遺跡

十三塚遺跡は、宮城県名取市手倉田字山に所在し、50haを有する大規模な集落跡である。立地する愛島丘陵は、高館丘陵から東に派生する標高30～40mの低丘陵で、著名な国史跡雷神山古墳などもその東端に位置している。本遺跡ではこれまでの調査で、縄文時代後期、弥生時代、古墳時代前・中期の遺構・遺物が発見されている。弥生中期後葉「十三塚式」の標式遺跡であり、古墳時代では、尾根上に完全に埋まりきらない窪んだ状態で43ヶ所の竪穴住居跡が確認できる稀有な遺跡でもある。

昭和54年の東D区A地点の調査では（恵美1980）、弥生時代中期の土壌墓14基、土器棺墓1基、竪穴状遺構2、焼土遺構2が発見されている（第3図）。玉類が出土したのは、勾玉が14号墓（竪穴状二段掘土壌墓）竪穴部の底面、管玉2点が13号土壌墓の底面である（註1）。



第1図 十三塚・飯野坂遺跡の位置と出土地点

(1 : 25,000)

(2) 飯野坂遺跡

飯野坂遺跡（かつては山居遺跡とも呼ばれていた）は、名取市飯野坂五丁目に所在し、国史跡飯野坂古墳群（前方後方墳5基、方墳2基）の立地する丘陵端部一帯を範囲とする。本遺跡周辺には多くの弥生時代の遺跡が分布しており、近隣では西方約700mの同一丘陵上に十三塚遺跡、北方約2kmの沖積地に原遺跡が位置している。

出土地点は、観音塚古墳南側の浅い谷を挟んだ北斜面の裾で、ここからは多量の弥生土器片（前・中期）が採集されており、その一部は太田昭夫氏（1988）、相澤（2011）が報告している。今回取り上げる勾玉未成品は、同地点から斎藤良治氏が採集されたもので、角田市史において写真が紹介されている（角田市1984）。

3. 玉類の概要と時期

(1) 玉類の概要

十三塚遺跡

【勾玉】

第4図1は、長さ4.0cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm、重さ11.8g。やや扁平感のある不定形勾玉で、透明感に乏しい。研磨は入念になされ、孔の内面までに及ぶ。孔はその周辺を一回り低く整形して、両側から斜めに穿孔している。孔の形は不整楕円形で、孔径は長径でa面が0.85cm、c面が1.0cmと玉幅に対してかなり大きめである。c面の穿孔部左下には、半円錐状の穿孔痕が残されており、複数回の穿孔によってこの形状に成形されたことがわかる。

【管玉】

第4図2は、長さ2.85cm、直径1.1cm、重さ4.4g、3は長さ2.4cm、直径1.1cm、重さ3.7g。いずれも太形の部類に属し、軟質で風化が著しい。穿孔は両側からなされており、回転痕跡が認められる。孔径も0.7cmと同じで、玉幅に対してはかなり大きめである。両者は長さが若干異なるほかは、肉眼ではよく似た印象を受ける。

飯野坂遺跡

【勾玉未成品】

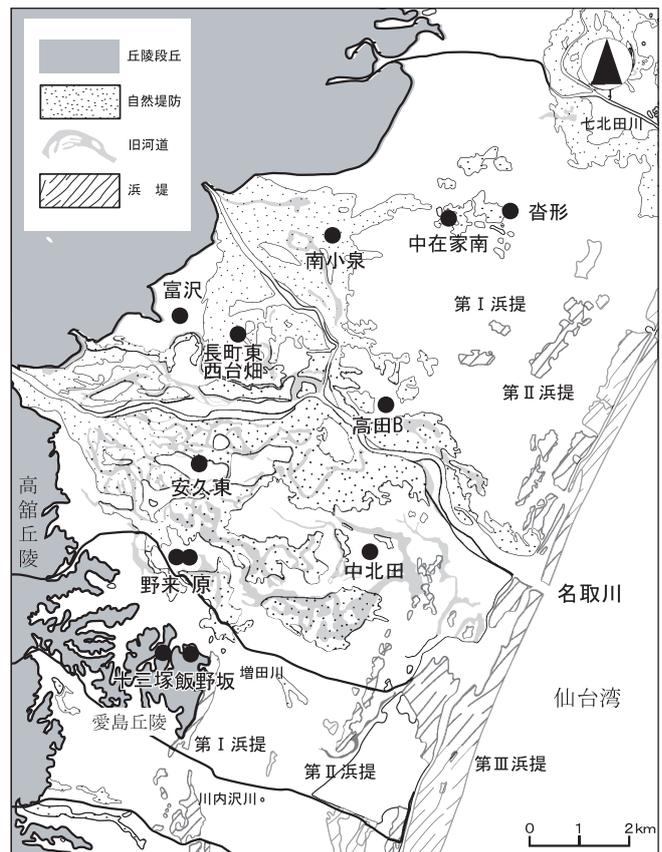
第6図2は、長さ4.2cm、幅2.1cm、厚さ1.6cm、重さ22.4g。不定形勾玉の未成品で肉厚感がある。研磨に伴う擦痕は、両面に短軸方向にそって観察され、孔周辺およびb背面の研磨面下には、整形時の敲打痕が部分的に残されている。孔は両側から播鉢状に穿たれており、回転痕跡が認められる。孔径はa面が1.1cm、c面が0.9cmである。ほぼ成品に近い状態であり、原石は小礫と考えられる。

(2) 玉類の帰属時期

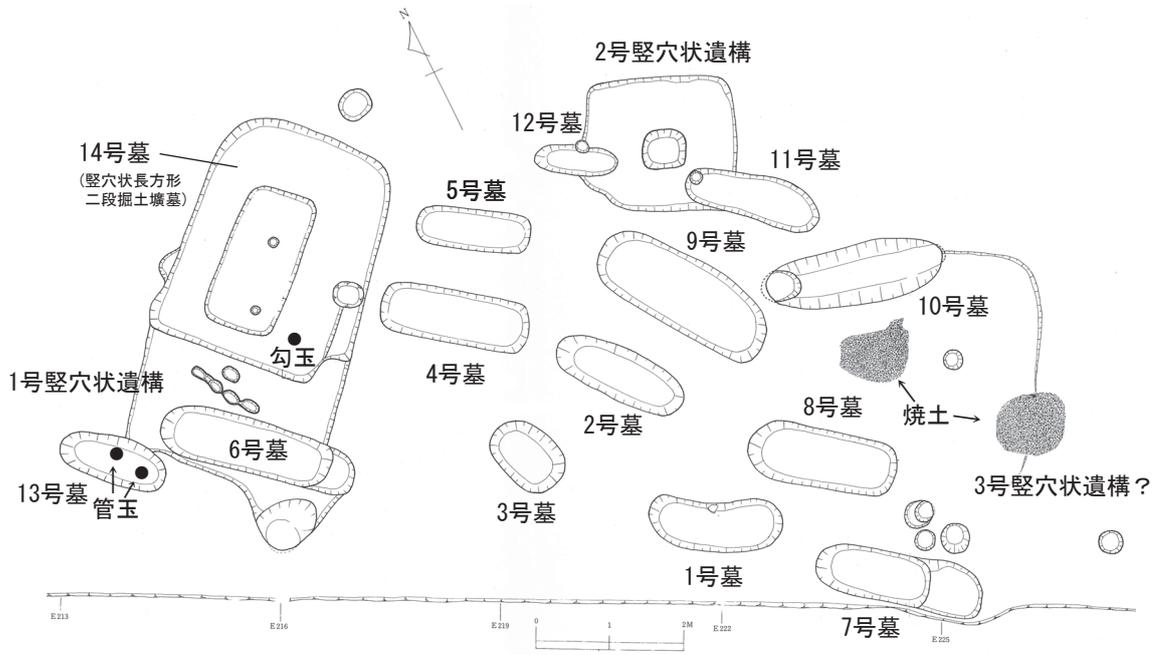
十三塚遺跡

玉類の年代を知るうえでは、土壙墓、土器棺墓出土土器の時期によることとなる。報文では弥生中期としているが、根拠となる土器の具体的な検討はなされていない。そこで、今回改めて時期を知りえる未報告の破片資料を含めてその編年的位置づけについて考えてみたい。

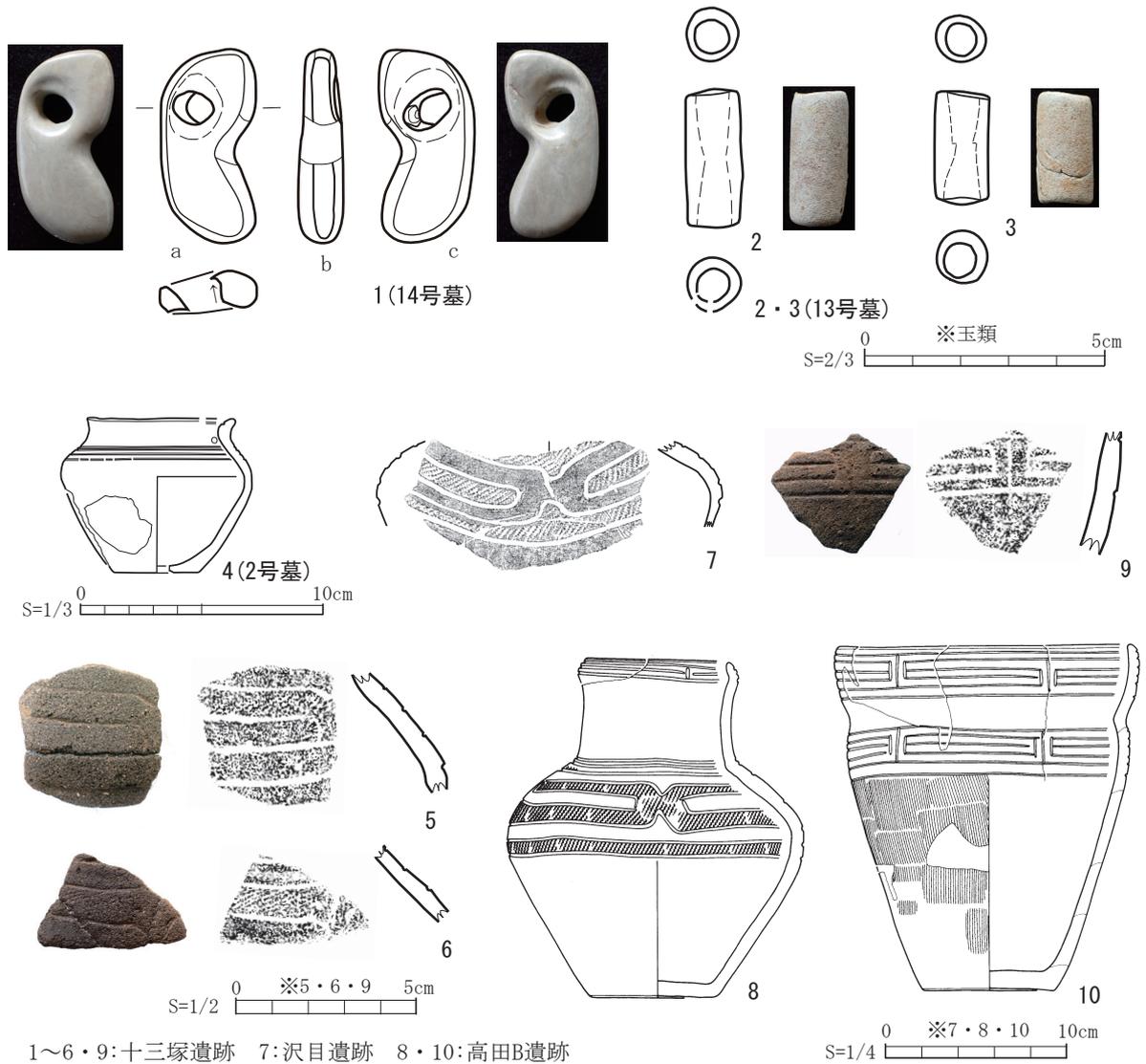
まず、2号墓検出面出土の小型鉢（第4図4）は、第5図上段に示した通り、前期末葉十三塚東D式から続く器種で、口縁部が屈曲して外反し体部がやや膨らみながら底部に至るものが祖型となる。4や第5図3の高田B遺跡（中期中葉榊形式）は、中期前葉原式を含めて比較すると、体部の無文化と肩の張りが



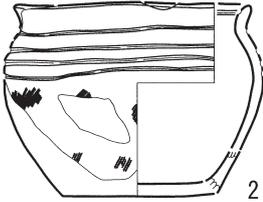
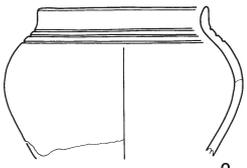
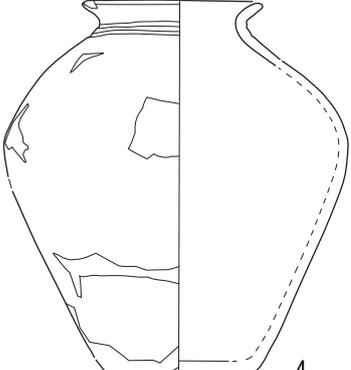
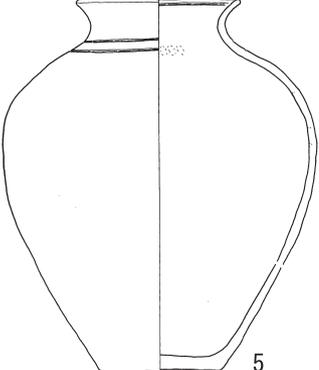
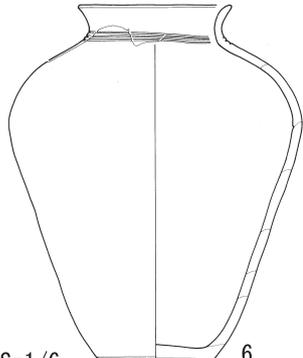
第2図 仙台平野の主な弥生前・中期遺跡分布図



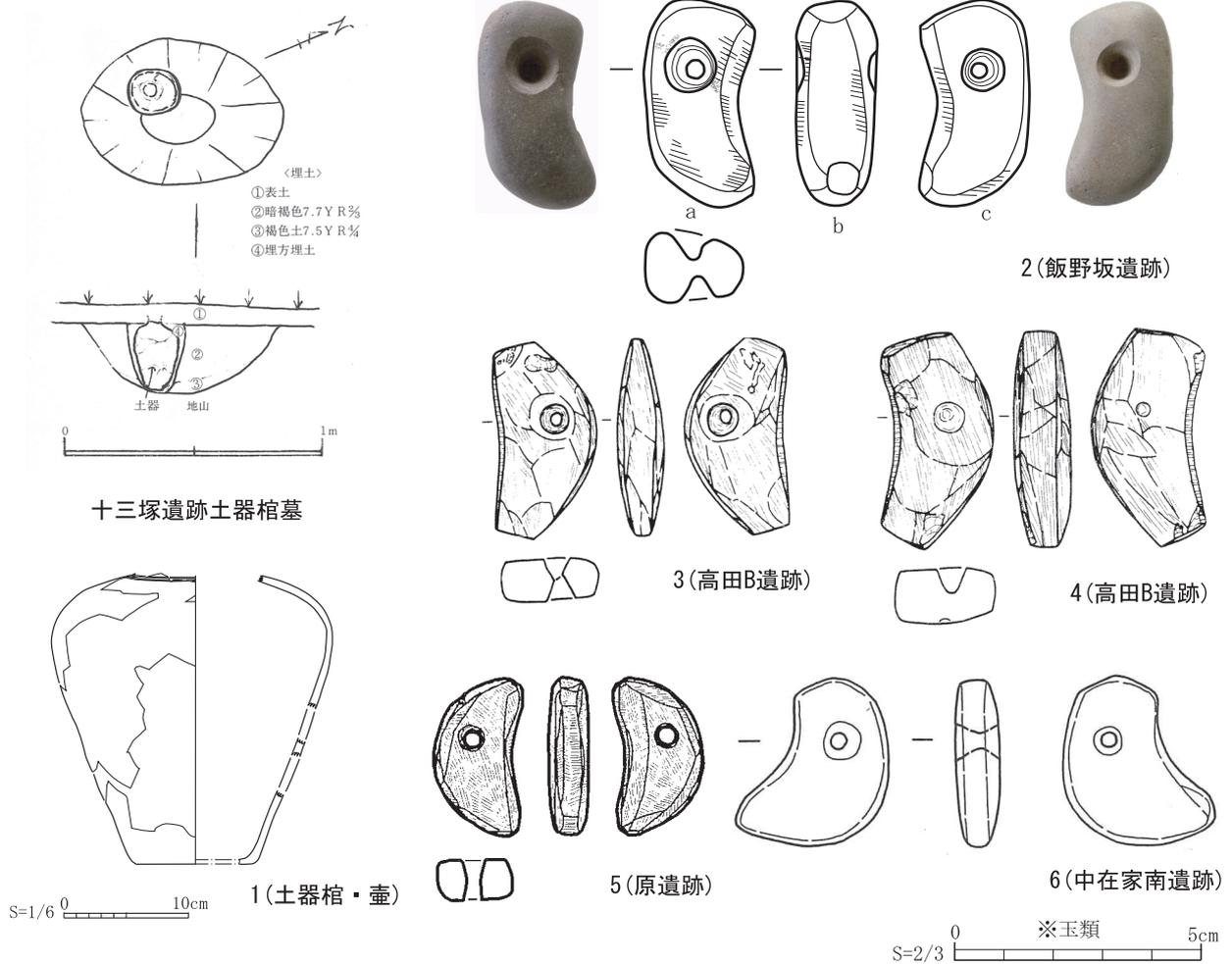
第3図 十三塚遺跡土壙墓群平面図



第4図 十三塚遺跡出土玉類・弥生土器

	前期末葉(十三塚東D式)	中期前葉(原式)	中期中葉(榊形式)
小型鉢	 1	 2	 3 S=1/4
遠賀川系中型壺	 4	 5	 6 S=1/6

第5図 仙台平野の小型鉢・遠賀川系中型壺の変遷



第6図 十三塚遺跡土器棺墓出土土器と飯野坂遺跡等の勾玉

強くなること、沈線文も細線化し頸部に集約することが指摘できる。このような型式変化を遂げていることから判断して、4は柵形式とするのが妥当と考える。

第4図5・6は、4号墓堆積土から出土した小型壺の肩部破片で、文様は磨消工字文系が変化したX字状文である。原式では主線内が無文であるが(第4図7)、柵形式になると無文部と縄文部が反転するとされている(石川2005 斎野2008)。5と6は同一個体と推定されるもので、主線内が縄文となっており、反転部の貫入も三角形と第4図8の高田B遺跡例(柵形式古段階)と同様であることから、これらは柵形式に相当するとみられる。

第4図9は、6号墓堆積土から出土した深鉢の体部破片である。文様は5本を単位とした工字文系の短冊文で、反転部はスリットで結合する。この文様は、4・6本単位で構成される浅鉢などにみられる変形工字文系とは異なり、類例として示した柵形式古段階の深鉢(第4図10)に特徴的に採用されるものである。

このほかに土器棺墓出土の壺(第6図1)を取り上げる。土器棺墓は、土壙墓群の南西約40mの地点で単独で検出されている。この壺は弥生前期に伝播した遠賀川系壺の系譜に連なるもので、仙台平野では柵形式までその属性を引き継ぐことが知られている。ここではこの系列の中型壺の変遷(第5図下段)をたどって本例の編年的位置づけを考えてみたい。

十三塚東D式は、肩部がなで肩で、体部中央からやや上方に最大径をもち、口縁部はくの字に外反する。原式になると、体部最大径の位置が十三塚東D式よりも上に上がり長胴化し、口縁部は頸部からやや立ち気味に移行しながら外反する。柵形式は、体部最大径の位置が原式よりもさらに上に上がりイカリ肩となり長胴化を増す。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がりながら短く外反する。このような器形をもとにした型式変遷に本例を対比するならば、柵形式に一致するのは明らかであろう。なお、柵形式新段階の中在家南遺跡の様相を見ると、該種壺は極端に減少しているの、本例はその古段階に位置づけられる可能性が高い。

以上のように土壙墓、土器棺墓出土土器は、いずれも柵形式に比定された。したがって、十三塚遺跡の玉類の年代は、弥生時代中期中葉に位置づけられる。

飯野坂遺跡

採集されている弥生土器は、前期末葉の十三塚東D式、中期前葉原式、中期中葉柵形式、中期後葉十三塚式と幅があるが、後二者は少量である。勾玉未成品の帰属年代は、これらの時期幅に収まるとみられるが、土器の出土量を勘案すると前期末葉～中期前葉ごろであろうか。

4. 玉類の石材同定

(1) 分析方法

玉類は、オックスフォード・インストルメンツ(Oxford Instruments)社製のポータブル型蛍光X線分析装置(X-Met7500:以下「p-XRF」とする)を使用し、遺物を損傷させることのない完全非破壊化学分析を行った。分析対象の遺物は大気雰囲気下のまま分析用の試料台に置き、X線防御カバーで覆ったのち、下方からの試料表面へのX線照射を行った。照射されるX線ビーム径は9mmで、軽元素分析を加速電圧13kV、照射電流45 μ Aで4秒間、重元素分析を同40kV、10 μ Aで1秒間とし、それを12回繰り返した計60秒間のエネルギー分散型X線スペクトル(EDS)の測定から、低元素を含む岩石・鉱物の分析に対応したMining LE-FP(パラメータ)法を用い酸化物重量パーセント(wt.%)を計算させ分析値とした。酸化物重量%値は、陽イオン比を再計算し、対象鉱物の理想化学式に照会し、同定を行った。分析手順は、飯塚・小野(2020)に準じている。

(2) 分析結果と解釈

表1に分析結果を示す。分析に際し理想とされるのは平らでなめらかな面にX線を照射することである。しかし管玉などの小型遺物の場合、平滑な面がなく、むしろ曲面であるため、励起されるX線が低減する。また大気雰囲気下でのp-XRFの分析では、ナトリウム(Na)以下の軽元素の分析ができない。ナトリウムは、一部の岩石・鉱物に含まれるため、分析値だけではなく肉眼観察や岩石学的知識による判別が重要である。したがってここで示す分析値は、あくまで参考値である。肉眼観察とp-XRF分析結果より、分析対象の石

表 1 p -XRF 石材分析結果一覧

遺跡名	分析番号	器種	石材名	備考
十三塚遺跡	JSD-1	勾玉	ネフライト (Nephrite)	第 4 図 1
十三塚遺跡	JSD-2	管玉	緑色凝灰岩 (Green tuff)	第 4 図 2
十三塚遺跡	JSD-3	管玉	緑色凝灰岩 (Green tuff)	第 4 図 3
飯野坂遺跡	INZ-1	勾玉未成品	シルト岩 (Siltstone)	第 6 図 2

材は、それぞれネフライト（透閃石岩）、緑色凝灰岩、シルト岩と判断した。

表 2 に十三塚遺跡の勾玉 (JSD-1) の p -XRF 分析結果を示す。表 2 には分析したオモテ、ウラ各 2 か所ずつの結果を示す。ネフライト(岩石)を構成するカルシウム角閃石 (鉍物) の理想式、 $\text{Ca}_2(\text{Mg}, \text{Fe})_5\text{Si}_8\text{O}_{22}(\text{OH})_2$ のうちマグネシウム - 鉄比 $\text{Mg}/(\text{Mg}+\text{Fe})$ は、0.92 ~ 0.94 を示し、これは透閃石 (Tremolite) に同定される。またこのマグネシウム - 鉄比から、蛇紋岩体に起源を持つネフライトと判別できる。

表 3 に十三塚遺跡の管玉 (2 点: JSD-2, JSD-3)、飯野坂遺跡の勾玉未成品 (INZ-1) の p -XRF 分析結果を示す。淡緑色を呈する管玉の表面は、肉眼ルーペ観察により微細な鉍物が集合した堆積性の岩石であることがうかがえる。管玉は 2 試料ともほぼ同じ化学組成を示した。高いシリカ (SiO_2) 濃度に加え、アルミナ (Al_2O_3)、鉄分 (Fe)、カリウム (K) が含まれる特徴から、緑色凝灰岩と判別した。緑色凝灰岩は、東北日本脊梁から日本海側一帯に分布し、石英、カリ長石、斜長石、火山ガラスから構成されるグリーントフの組成に近似する。飯野坂遺跡の勾玉未成品は、微細粒な表面、緑色凝灰岩と比してより高いシリカ濃度、アルミナ、カリを含むが鉄分がほぼ含まれていないことから石英と長石からなるシルト岩と判別した。

(3) まとめ—石材分析から得た今後の課題—

本報告者の一人、飯塚は東南アジアの新石器時代や東日本の縄文時代の石器石材の網羅的な調査を行っており、特に磨製石斧や装身具に使われていることの多い緑色の石材 (ネフライトやヒスイ輝石岩) の用途や広域的分布に注目している (飯塚・小野 2020 飯塚 2021 など)。本調査では弥生時代の遺跡から出土した勾玉と管玉の化学分析を試みた。

弥生時代の装身具のうち、特に管玉は、碧玉や緑色凝灰岩 (註 2) を使って作られている例が多く、本報告の管玉もそれにあたる。一方、勾玉や小玉類は、「ヒスイ岩 (ヒスイ輝石岩～オンファス輝石岩)」、滑

表 2 十三塚遺跡 勾玉 p -XRF 分析結果

重量 %	JSD-1_1	JSD-1_2	JSD-1_3	JSD-1_4
SiO ₂	54.97	54.72	54.11	55.75
TiO ₂	0.03	0.04	0.03	0.03
Al ₂ O ₃	2.91	2.97	3.25	2.99
FeO	3.18	3.79	3.04	3.61
MnO	0.10	0.10	0.08	0.11
MgO	26.62	25.39	27.77	24.72
NiO	0.01	0.02	0.03	0.02
CaO	7.42	8.24	6.92	8.10
Total	95.25	95.27	95.22	95.32
陽イオン比				
酸素 (O) =	23	23	23	23
Si	7.640	7.643	7.524	7.751
Ti	0.003	0.004	0.003	0.003
Al	0.477	0.489	0.533	0.489
Fe	0.370	0.443	0.353	0.420
Mn	0.012	0.012	0.010	0.013
Mg	5.510	5.283	5.751	5.118
Ni	0.001	0.002	0.003	0.002
Ca	1.104	1.233	1.031	1.205
Total	15.118	15.109	15.207	15.002
Mg/(Mg+Fe)	0.937	0.923	0.942	0.924
鉍物名	Tremolite	Tremolite	Tremolite	Tremolite

表 3 十三塚、飯野坂遺跡 玉類 p -XRF 分析結果

分析番号	JSD-2	JSD-3	INZ-1
遺跡名	十三塚	十三塚	飯野坂
図番号	第 4 図 2	第 4 図 3	第 6 図 2
石材	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	シルト岩
色相	淡緑色	淡緑色	薄茶色
重量 %			
SiO ₂	64.06	61.65	80.10
TiO ₂	0.71	0.68	0.16
Al ₂ O ₃	18.51	21.78	11.91
FeO	7.53	7.37	0.48
MnO	0.22	0.18	0.01
MgO	0.00	0.00	0.00
CaO	0.33	0.36	0.25
Na ₂ O *	-	-	-
K ₂ O	3.77	3.11	2.56
P ₂ O ₅	0.00	0.00	0.00
SO ₃	0.46	0.51	0.81
Total	95.59	95.63	96.27

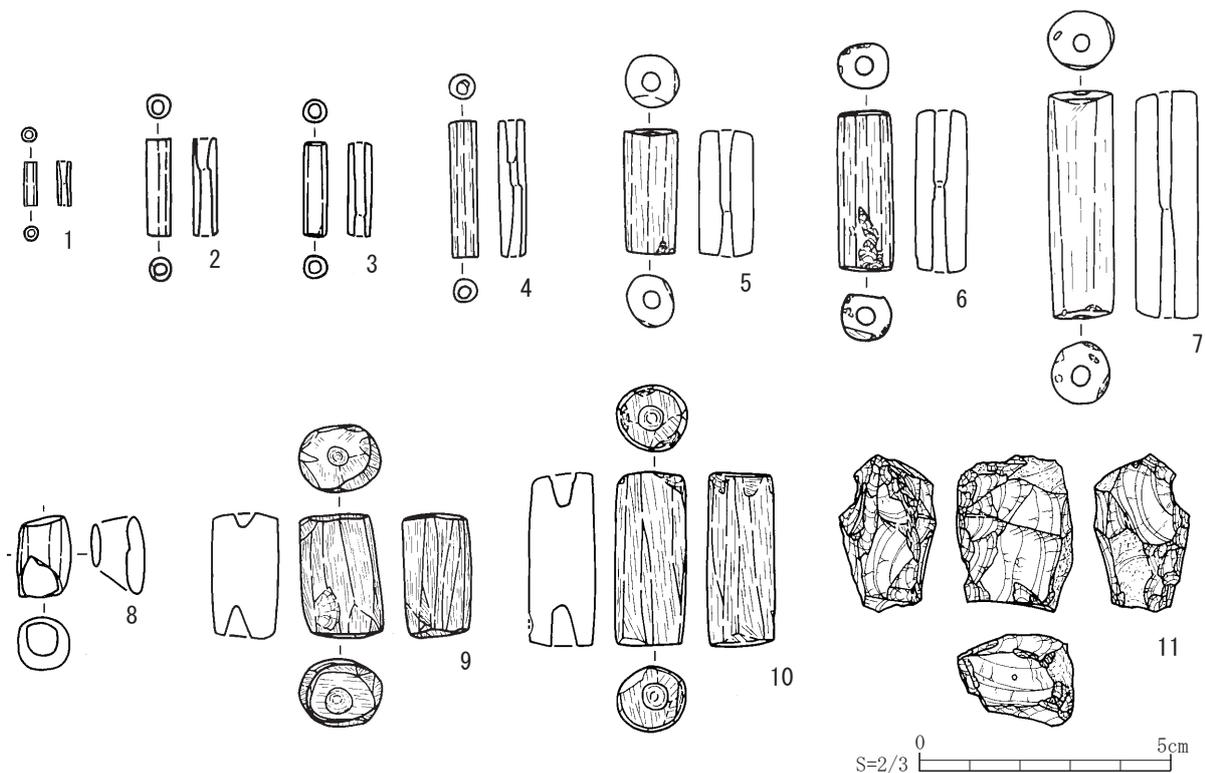
* p -XRF では Na の分析はできないが、空欄で示す。

石で作られていることが多い。今回、十三塚遺跡の勾玉は、ネフライト製のものであった。東南アジアや中国の新石器時代の玉器（装身具）は、ネフライトで作られていることが多い一方で、日本では縄文時代の磨製石斧にネフライトが使われている例が多い。むしろ装身具に使われている例は少ない。これまでの調査で報告されているネフライト製装身具は、富山市縄文前期の小竹貝塚から3点の玦状耳飾（飯塚 2017）、宮城県栗原市縄文前期後葉～中期初頭の嘉倉貝塚出土の1点の玦状耳飾に限られる（飯塚・小野 2020）がある。例外として、白色が特徴的な（炭酸塩岩起源の）ネフライトの玦状耳飾が福井県あわら市縄文前期の桑野遺跡（17点）や群馬県下仁田町下鎌田遺跡（1点）から報告されている（中村・飯塚 2020, 2021）。しかしながら、弥生時代の例、また勾玉にネフライトが用いられている例はこれまでに報告がない。「ヒスイ岩」と同じく、ネフライトも地質学的な産地は限られており、緑色ネフライトは長野県白馬村～新潟県糸魚川市周辺の蛇紋岩体に産することが確認されている（飯塚ほか 2016）。そのマグネシウム-鉄比 $Mg/(Mg+Fe)$ は、0.85～0.93 の範囲を示し、十三塚遺跡の勾玉のもつ組成と調和的である。今回の調査結果は、広域的な石材や文化の交流の歴史を考えていくうえで大変有意義な成果であると考えている。

5. 考察

十三塚遺跡の勾玉は、東北地方の弥生時代では初のネフライト同定例であろう（註3）。緑色ネフライトの原産地は仙台平野周辺地域にはなく、上述した北信越地域からもたらされた可能性も考えられる。いずれにしても遠隔地で産出する石材である。一方で、飯野坂遺跡の勾玉未成品は、シルト岩製とされたことから、近傍の在地でも採集できる石材を利用していた。両遺跡は同一丘陵の近接した位置関係にあることから、集落間の流通に有意な関連性を持っていたことが考えられる。

仙台平野の中央付近に位置する仙台市高田B遺跡では、珪質頁岩製の勾玉成品（第6図3）と未成品（第6図4）が出土しており、ここでも在地で製作されていたことが明らかになっている（註4）。この他に成品の出土例としては、名取市原遺跡の第6図5（註5）、仙台市中在家南遺跡の第6図6（註6）がある。仙台平野の勾玉は、大きさ、形状とも様々で、石材もネフライト、「ヒスイ岩」、シルト岩、珪質頁岩、凝灰岩、安山岩と遺跡ごとに異なり、統一した石材選択がなされていたとは言い難い。イメージとしての勾玉形は



第7図 高田B遺跡出土管玉成品・未成品

あるものの、細部は製作者の感覚的などころに依っていたのではないだろうか。縄文時代の多彩な形状の勾玉とも相通じるものがある（註7）。

次に管玉の様相について触れてみたい。高田B遺跡では成品と未成品が出土しており、仙台平野で勾玉とともに管玉づくりが行われていた遺跡として評価されよう。成品には太形と細形があり、大半を占める碧玉製品は、未成品がないことから搬入品としている。未成品は凝灰岩質と頁岩質の太形のみで、側面剥離段階（第7図11）と研磨・穿孔段階（第7図9・10）ものがあり（註8）、これらの成品は確認できないことから、遺跡外へと持ち出された可能性があるとしている（荒井・赤澤2000）。

ここで穿孔径に着目してみると、碧玉製成品は、第7図1の0.1cm、2～4の0.2cm、5～7の0.3cmと玉幅に比例して穿孔幅を調整している。一方、未成品の9・10は、碧玉製太形成品と比較して仕上げ研磨で若干直径の減少を考慮しても長さに対して幅が太く、加えて穿孔径も0.5cmと大きい特徴をもつ。また、孔の断面形では、成品は円柱状で先端が丸みを持つ台形状を成すのに対して、未成品は円錐形ないしはすり鉢状である。これらのことからこの二者は、穿孔具自体の形状や素材が異なり、別々の規格で作られたことが考えられる。したがって、報文での碧玉製品が搬入品との指摘は、妥当な見解と思われる（註9）。8のチャート製管玉については、玉幅に対して穿孔径が異様に大きく、側面が丸味をおびるなど、碧玉製品との違いは明瞭であることから、在地製作品とみておく（註10）。

高田B遺跡の状況からすると、在地製作の視点で十三塚遺跡の軟質緑色凝灰岩製太形管玉（第4図2・3）も検討する必要があると思う。碧玉・硬質緑色凝灰岩製管玉は、穿孔径は玉幅の半分以下になるのであるが、この玉は先に述べた通り、玉幅に対して穿孔径が大きく異なる特徴をもち、孔の断面形も円柱状ではなく先細りの筒形になる。これは単に規格外品が搬入されたともとれるが、在地製作における穿孔技術の特性とする見方も考慮すべきであろう（註11）。

ここまで、仙台平野の弥生中期管玉について、搬入品と在地製作品の観点から、その具体相を探ってきた。そこで問題となるのが、細形管玉にみるような西日本的な定型的玉製作技術の導入の有無である。現状では、未成品が太形のみであること、在地的な製作技法をとること、施溝分割片、磨製石針が確認されていないことなど、否定的な要素が多い。

【謝辞】

本稿を草するにあたり、下記の方々や機関よりご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

荒井格、恵美昌之、大上立朗、太田昭夫、小野章太郎、斎藤良治、斎野裕彦、佐藤祐輔、三浦一樹

仙台市教育委員会、島根県古代文化センター

石材同定分析調査には、日本学術振興会科研費（基盤研究C：JP18K01088：飯塚）を運用した。

註1：報文では竪穴状二段掘土墳墓は、遺構番号が付されていなかったことから、本稿では便宜的に14号墓とした。また、今回報告する玉類や弥生土器については、再実測したものを掲載した。

註2：碧玉（へきぎょく）は、英語ではjasper（ジャスパー）と称し、微細な石英（SiO₂）の集合体と定義されている（「地学事典（平凡社）」）。緑色凝灰岩（green tuff）は、火山灰、すなわち火山ガラスと微量の石英、長石類の堆積物である。ケイ素の他にアルミニウムや鉄、カリウム、カルシウムなどを含むため、緑色で見た目が似ている碧玉と緑色凝灰岩でも、化学組成は明確に異なる。

註3：ネフライトは、近年、飯塚・小野氏の研究により、宮城県域では縄文時代前期前葉から晩期まで、主に磨製石斧の石材として用いられていたことが指摘されており、県内ではすでに縄文時代から流通していた石材である。

註4：高田B遺跡では、河川跡、遺物包含層が検出されており、それらから弥生前期末葉～中期中葉の土器が玉類とともに出土している。榊形式古段階を主体とするが、原式も相当量占めているので、玉類の時期も中期前葉までさかのぼるものもあるかもしれない。図示した2点は同一製作者ではないかとされている。

註5：原遺跡では、2点の勾玉が出土している（大友・鴫崎2002）。いずれも遺構外（遺構検出時）出土なので詳細な時期はわからないが、調査区内で検出されているのは、中期前葉の河川跡3条である。堆積土からは多量の原式土器や石包丁などの大陸系磨製石器が出土していることから、勾玉は本来、河川跡に伴っていた可能性が高い。図示した勾玉の石質は、淡緑色の凝灰岩質、もう1点は安山岩質である。

註6：中在家南遺跡では、中期中葉の土墳墓、土器棺墓が検出されている（工藤ほか1996）。このうちS K 36土墳墓からは、副葬品として勾玉1点、碧玉（質）製細形管玉13点、扁平片刃石斧・ノミ形石斧各1点、石鏃3点が埋納されていた。

勾玉の石質は、*p*-XRF 分析により「ヒスイ岩」と同定されており、この原産地は糸魚川—青海地域と推定される（飯塚ほか、準備中）。

- 註7：今回取り上げた勾玉の最大公約数的な共通点をあげれば、胴の挟りが浅いことである。このような形状は、縄文時代の勾玉にはまま見られるもので、県内では、近年、栗原市山王圀遺跡（報文 pp. 80、第 44 図 1・3）や大崎市小松遺跡（報文 pp. 375、第 293 図 3）において晩期（大洞 A～A' 式期）の事例が報告されており、その形態的系統性を暗示する。そういった意味では、仙台市長町東遺跡第 10 次調査の緑色凝灰岩製垂飾（報文：pp. 127、第 102 図 54）や高田 B 遺跡の凝灰岩製垂飾状未成品（報文：pp. 271、第 271 図 3）も注意しておきたい装身具である。
- 註8：側面剥離段階の未成品のうち、報文では Kd20（報文：pp. 270、第 270 図 14）が珪質頁岩、Kd32（報文：pp. 211、第 211 図 9）が珪化凝灰岩とされているが、飯塚氏の同定分析によれば、いずれも緑色凝灰岩としている。高田 B 遺跡以外では、長町東遺跡第 4 次調査の S I 135（古墳時代後期の竪穴住居跡）から碧玉製の形割（側面剥離）段階とされる管玉未成品が出土しているものの、1 点のみなので評価は難しい。仙台平野において複数の集落で管玉製作が行われていた傍証となりうるのか、この遺跡での類例の増加を待ちたいと思う。
- 註9：大上立朗氏は、能登半島以東の「タテ割り主体地域」で製作された管玉が北海道・東北地方に供給されたとした。特に仙台平野への流通に関しては、福島県域と秋田県域の集団を仲介者として想定している（大上 2021）。大賀克彦氏は、列島出土の弥生勾玉を法量と石材から分析を行っている（大賀 2001 2011）。管玉の全長と直径の平均値から「領域」を設定しており、直径 0.3cm 未満、全長 1.5cm 以下の細形は領域 Se と分類し、その生産地は北陸東部、北陸西部、近畿北部、畿内北部の地域に求めている。そのうえで、北海道・東北の管玉については、太平洋側内陸部や日本海側沿岸ルートによる成品の流通を図示する。2010 年論文においては、長町東遺跡 S K 214 土壌墓、中在家南遺跡 S K 36 土壌墓出土管玉の一部に西日本的な法量を示すものがあり、後者には山陰系管玉の存在も指摘するが、さらなる状況証拠の積み重ねが必要と説いている。仙台平野で領域 Se に該当する管玉は、高田 B 遺跡の第 7 図 1、中在家南遺跡 S K 36 土壌墓でもまとまった量が出土している。根岸洋・大上氏の分析によっても東北地方では中期中葉に領域 Se が多出するデータが示されている（根岸・大上 2021）。また、東北地方での碧玉製管玉の原産地同定は、青森県宇鉄・垂柳・舟場向川久保（2）遺跡の細形管玉（中期中葉）で実施されており、宇鉄・垂柳遺跡では猿八産、船場向川久保（2）遺跡では猿八産に加えて女代 B 遺物群等の同定報告がある（藁科・福田 1997 遺物材料研究所 2022）。これらの先行研究を総合すると、仙台平野の碧玉製管玉は、理化学的分析を行っていないので、詳細な地域の特定はできないが、大きくは北陸地方との関係を考えてよいであろう。仙台平野と北陸地方の関係については、木製農具、土器、大陸系磨製石器を介してその接点を求める見解もある。（石川 2021 相澤 2019 佐藤 2021）。
- 註10：青森県弘前市薬師遺跡・岩手県北上市金附遺跡では、在地的な技法や在地の石材でつくられた管玉の成品・未成品が確認されており、東北北・中部でも自家生産的な体制をとっていた地域がある。斎野裕彦氏は、縄文的管玉から大陸系管玉への変換が弥生前期～中期中葉に行われたとし、東北地方での地域的な管玉製作を指摘している（斎野 1998）。
- 註11：米田克彦氏は、山陰地方の管玉の穿孔形態について論じるなかで、軟質緑色凝灰岩製に多くみられる両面穿孔で、初孔孔径が大きい鼓形を打製石針によるものとしている（米田 2009）。この形状を打製穿孔具の特徴とするならば、十三塚の管玉も同様の穿孔形態をとることから、打製の錐状石器を用いた可能性がある。

【引用・参考文献】

- 相澤清利 2011「飯野坂遺跡出土の弥生土器について」『郷土なとり』25 周年記念号 名取市郷土史研究会
- 相澤清利 2019「東北地方における北陸系弥生土器の模倣について」『宮城考古学』第 21 号 宮城県考古学会
- 荒井格・赤澤靖章 2000『高田 B 遺跡』仙台市文化財調査報告書 242
- 荒井格ほか 2014『長町東遺跡第 10・11 次調査—仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書 X—』仙台市文化財調査報告書 422
- 飯塚義之・古川知明・中村由克 2016「富山城石垣土塁から出土したネフライト玉石の来源」『大境』第 35 号 pp. 67-72 富山県考古学会
- 飯塚義之 2017「ハンドヘルド蛍光 X 線分析装置を用いた石器石材分析の試み」『富山市の遺跡物語』No. 18 pp. 36-39 富山市埋蔵文化財センター
- 飯塚義之・小野章太郎 2020「完全非破壊化学分析による宮城県地域の縄文時代磨製石斧および石製装身具の石材研究」『宮城考古学』第 22 号 pp. 137-156 宮城県考古学会
- 飯塚義之 2021「考古フォーカス：東南アジア先史時代のネフライト製石器の研究」『考古学研究』261 号（68-1）pp. 107-109（巻頭絵 2 頁）考古学研究会
- 石川日出志 2005「仙台平野における弥生中期中葉土器編年の再検討」『関東・東北弥生土器と北海道縄文土器の広域編年』
- 石川日出志 2021「高田 B 式の形成過程をどう考えるか—東北弥生文化再考の試み—」『靱』第 10 号 弥生時代研究会
- 遺物材料研究所 2022「舟場向川久保（2）遺跡出土細形管玉の産地、遺物群同定分析」『舟場向川久保（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 625
- 恵美昌之 1980『十三塚遺跡』名取市文化財調査報告書 8
- 大賀克彦 2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第 86 巻第 4 号

- 大賀克彦 2010 「女代南B群碧玉製管玉に関する認識」『中原遺跡Ⅳ』佐賀県文化財調査報告書 182
- 大賀克彦 2011 「弥生時代における玉類の生産と流通」『弥生時代 講座日本の考古学5』
- 大上立朗 2021 「弥生時代併行期の北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第35号 秋田県埋蔵文化財センター
- 太田昭夫 1988 「宮城県における弥生式土器編年について」『東北地方の弥生式土器編年について』縄文文化検討会
- 大友透・福山宗志 1997 『原遺跡－県道名取村田線改良工事関係－』名取市文化財調査報告書 38
- 大友透・鴫崎哲也 2002 『原遺跡－ダイエー名取店建設用地関係発掘調査報告書－』名取市文化財調査報告書 48
- 小野章太郎編 2021 『北小松遺跡ほか－田尻西部地区ほ場整備事業に係る発掘調査総括報告書－』宮城県文化財調査報告書 255
- 金子昭彦ほか 2006 『金附遺跡発掘調査報告書－緊急地方道路整備事業関連遺跡掘調査 県営ほ場整備事業下門岡地区関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 482
- 上條信彦編 2021 『国史跡山王圀遺跡の研究Ⅱ－石器・石製品・土製品・骨角器編－』弘前大学人文社会学部 北日本考古学研究センター
- 角田市 1984 「弥生時代 文化のあけぼの」『角田市史1 通史編(上)』
- 工藤信一郎ほか 2007 『長町東遺跡第4次調査－仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』仙台市文化財調査報告書 315
- 工藤哲司ほか 1996 『中在家南遺跡』仙台市文化財調査報告書 213
- 斎野裕彦 1998 「アクセサリーの考古学」『地底の森ミュージアム 平成10年度特別企画展図録』富沢遺跡保存館
- 斎野裕彦 2008 「弥生集落の諸相①仙台平野」『弥生時代の考古学8－集落からよむ弥生社会－』同成社
- 佐藤由紀男 2021 「東北北部における弥生時代の磨製石斧の系譜からみた地域間交流」『地域と考古学』Ⅱ 向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会
- 神康夫ほか 2014 『上新岡館・薬師遺跡－県営一般農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告－』青森県埋蔵文化財調査報告書 546
- 鈴木舞香ほか 2019 『沢目遺跡－フレスコキクチ店舗建設事業関連発掘調査報告書－』名取市文化財調査報告書 72
- 中村由克・飯塚義之 2020 「下鎌田遺跡の玦状耳飾の蛍光X線分析とその再評価」『下仁田町自然史館研究報告』第5号 pp. 19-26.
- 中村由克・飯塚義之 2021 「透閃石ネフライト製玦状耳飾の再評価：アジア大陸渡来品の可能性」『日本第四紀学会2021年大会(2021年9月)発表要旨集』日本第四紀学会
- 名取市教育委員会 1995 「文化財資料整理事業 十三塚遺跡」『平成6年度年報』名取市文化財調査報告書 36
- 根岸洋・大上立朗 2021 「東北地方における弥生前・中期の碧玉製管玉」『靱』第10号 弥生時代研究会
- 米田克彦 2009 「穿孔技術からみた出雲玉作の特質と系譜」『出雲玉作の特質に関する研究－古代出雲における玉作の研究Ⅲ－』島根県古代文化センター
- 藁科哲男・福田友之 1997 「青森県宇鉄・砂沢・垂柳遺跡出土の碧玉製管玉・玉材の産地分析」『青森県立郷土館調査研究年報』第21号 青森県立郷土館

名取市十三塚遺跡出土の遠賀川系壺再報告

相澤 清利

1. はじめに

十三塚遺跡出土の遠賀川系壺は、東北地方の該種土器研究には欠かせない資料として取り上げられている。資料中、全体の形状が把握できていたものは1点のみであったが、東日本大震災を契機とした再整理事業において2点の壺が復元されるに至った。

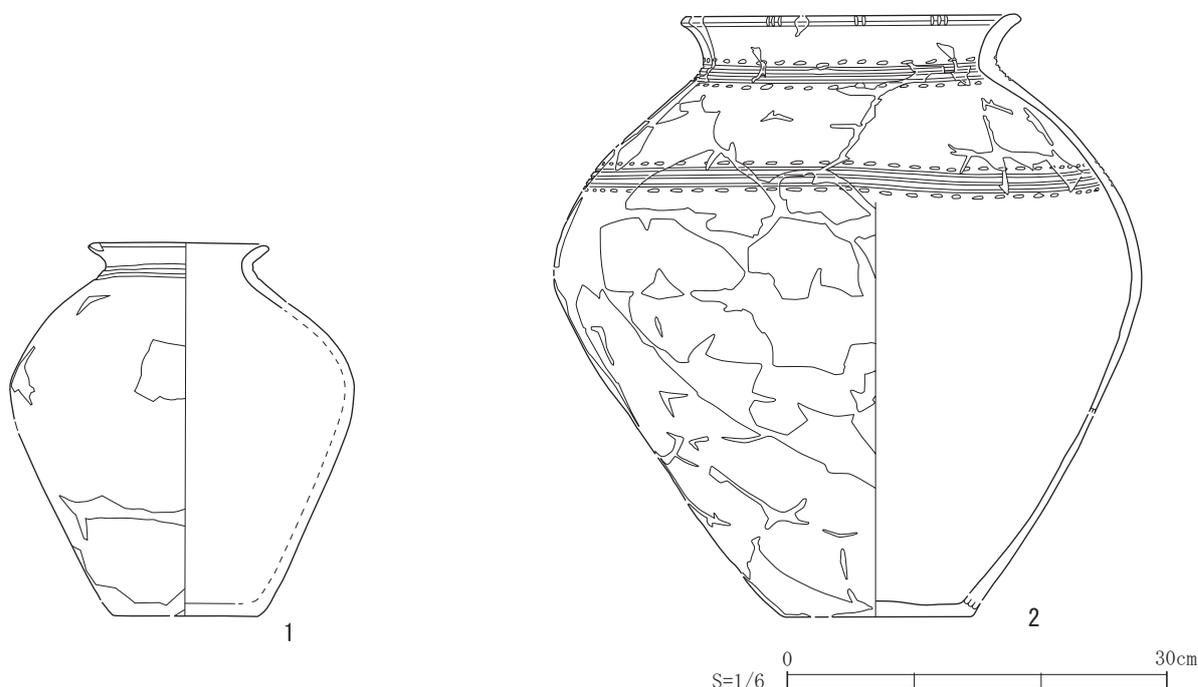
そこで、これらの土器が今後の弥生時代研究に寄与することは大きいと考え、本誌上に再実測図を報告することとした。

2. 遺跡と調査の概要

遺跡の概要については、本誌「名取市十三塚・飯野坂遺跡出土の勾玉・管玉について」に記載しているのでそちらを参照願いたい。

遠賀川系土器を含む弥生土器が出土したのは、昭和51・53年の東D区の調査で、昭和54年に概報（名取市報文第6集 1979）が出された後、平成6年度の年報（名取市報文第36集 1995）において前期弥生土器の報告がなされた。土器は北西むき斜面のくぼみに堆積した黒褐色土に流入した状態で出土しており、時期は福浦島下層式から十三塚式までを含むものとされている。土器以外では、石包丁1点、環状石斧2点（うち1点は未成品）、有角石斧？1点が出土している。

今回報告するのは、第1図1が報文（第36集）中の図2-12（pp. 27）、第1図2が図10-134（pp. 35）に対応する。



No.	器種	特徴		法量 (cm)		
		外面	内面	口径	底径	器高
1	壺	頸部：2条平行沈線文、横位ミガキ	横位ミガキ	14.4	11.5	29.8
2	壺	口唇部：2～3単位の刻目状刺突文、頸・体部：3条平行沈線文、その上下に列点刺突文、横位ミガキ	横位ミガキ	27.0	14.9	47.9

第1図 十三塚遺跡出土の遠賀川系壺

名取市温南山古墳出土の形象埴輪

太田 昭夫

1. はじめに

名取市域には大小さまざまな古墳が築造されており、特に県内では大型古墳の密集地帯として知られている。その中で埴輪を持つ古墳には、前期では雷神山古墳や薬師堂古墳、中期では名取大塚山古墳や経ノ塚古墳、毘沙門堂古墳などがあり、温南山古墳（註1）も埴輪を持つ中期古墳の一つとして数えられている。温南山古墳は未調査のために詳細は不明であるが、以前に採集された埴輪片 10 数点が当市教育委員会に保管されており、その中には形象埴輪とみられる貴重な資料も含まれている。ここではその形象埴輪を中心に紹介し、今後の古墳や埴輪研究の資としたい。

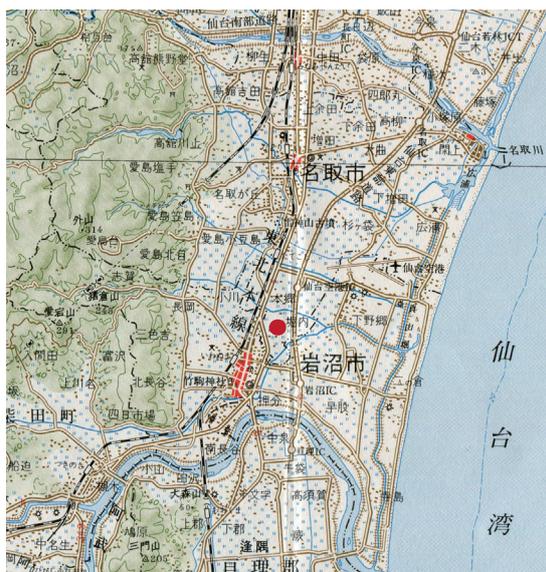
2. 温南山古墳と出土埴輪

(1) 温南山古墳の概要（第1図）

温南山古墳は JR 名取駅の南方約 5.5km にあり、岩沼市との市境付近の名取市堀内字鶴に所在する。古墳は丘陵部からは数 km 離れた平野部にあり、海岸平野の微地形変遷による第 I 浜堤列上に立地している。古墳はその浜堤砂層やその上を覆う河川の洪水砂層などを積み上げて墳丘としている（註2）。現在は径が約 25m、高さが 3m 以上の円墳状の墳丘が確認できるが、以前にあった北東側の畑の高まりを前方部と推定し、帆立貝形の前方後円墳とも考えられている。前方後円墳とすれば南北の全長は 30 ～ 40m の規模となる。墳丘頂部の中央には二等三角点が設置されており、その標高は 8.2m である。

(2) 温南山古墳出土の形象埴輪（第2図）

形象埴輪とみられる資料は 3 点あり、その中の 2 点（1・2）は同一個体と考えられる。この 2 点は昭和 61 年に行われた三角点の測定の再観測の際に出土したもので、その後に現地確認した恵美昌之氏によると墳頂部の表土下の黒色砂質土から出土したとのことである。



● 温南山古墳



現墳丘の等高線は一部復元している。
アミ部分は前方後円墳であれば想定される古墳墳丘。

第 1 図 温南山古墳の位置

1は内面の積上げ痕を横方向にして上下にすると、横17cm、縦12cm程の破片で、外面には突帯痕とみられる三列の縦方向の剥離面があり、その間を埋めるように矢羽根状の線刻が施されている。突帯や線刻前には全面に細かなハケメ調整が行われている。また上面左側はわずかに剥離部分を残すが粘土の末端部とみられ、その右側には貫通孔が確認される。内面はヘラナデ調整されるが徹底せず、成形時の粘土積上げ痕を数列残している。2は6cm四方の破片で、1と同じく帯状の剥離面と斜方向の線刻がみられる。2の一側面も1と同じく粘土の末端部とみられる。これら2点は焼成が比較的良好で、胎土には海綿骨針がわずかに含まれている。断面がわずかにカーブしており、板づくりによる成形かは明らかではない。

これら1・2については若松良一氏によると、上下を左回転し剥離面を横にすると2点とも家形埴輪の壁体部分と考えられ、1の中段と下段の剥離は水平な押縁、やや屈曲する部分の上部の剥離は屋根の軒の貼り足しの痕跡とみられるとのこと、また矢羽根状の線刻については網代壁か藁（わら）壁の表現ではないかということである。壁体部に矢羽根状の線刻を持つ例には、近くでは福島県会津坂下町経塚1号墳がある。また藤澤敦氏によると図のような上下方向で推測すれば、家形埴輪の屋根部の一部で、粘土末端部は屋頂部の棟付近の接合部、帯状の剥離面は縦方向の押縁を表現したものではないかとのことである。現在のところ壁体部か屋根部の解釈が可能とのこと、さらに今後の課題としたい。第2図右下に想定される家形埴輪のイメージ図を示した。

3は断面が直線的で一端が直角に屈曲するところで破損しており、板づくりによる成形と考えられる。内外面とも丁寧にヘラナデ調整されている。これも家形埴輪の一部で隅角部分と推定したが、若松氏からは他に鞍形埴輪の矢を入れた筒部の可能性もあるとのご指摘をいただいた。鞍形埴輪の類例には、近くでは山形県山形市菅沢2号墳がある。

（3）温南山古墳出土の円筒埴輪（第3図）

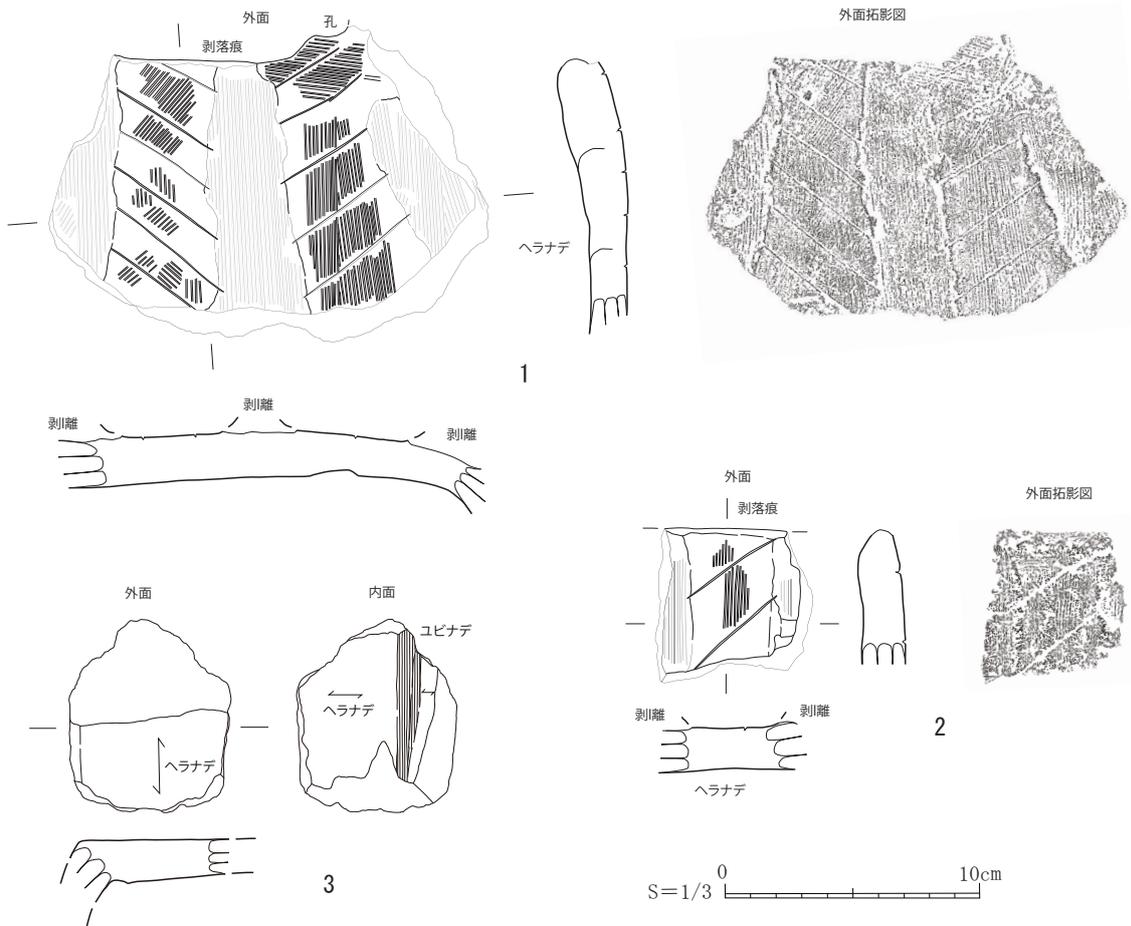
円筒埴輪は墳丘などから10点程採集されており、その中の7点を図示した。1～3は口縁部、4は底部、5～7は体部破片である。底部を除いては多くが目の細かなタテハケで器面調整され、口縁端部と突帯周辺がその後にヨコナデ調整されている。底部は外面ユビナデ、内面ヘラナデである。これら7点の資料も焼成が比較的良好で、胎土には海綿骨針がわずかに含まれている。なお3については、藤澤氏から口縁部の作りからみて別の種類の埴輪ではないかのご指摘をいただいている。

3. まとめ

今回の検討により温南山古墳出土の埴輪に家形埴輪などが含まれていることが判明した。この家形埴輪は数条の突帯と矢羽根状の線刻をもつのが特徴である。家形埴輪は全国的に前方後円墳であれば後円部墳頂部の埋葬施設付近の重要な場所やその周辺から出土している例が多い。温南山古墳でも墳頂部から出土しており、それと共通している。名取市域では家形埴輪は5世紀前半に位置付けられている名取市経ノ塚古墳から出土しており、温南山古墳例はそれに次ぎ2例目となる。

なお温南山古墳の円筒埴輪は1次調整のタテハケを特徴とするもので、川西編年の第V期に相当し、また藤澤氏による富沢系列の仲間に含まれる。こうした埴輪の特徴や古墳の比較検討などから、温南山古墳はおおむね5世紀後葉を中心とした時期に位置づけられる。

最後に今回の埴輪紹介にあたり、恵美昌之氏、丹羽 茂氏、若松 良一氏、藤澤 敦氏には多くの貴重なご教示を賜った。記して深く感謝申し上げます。



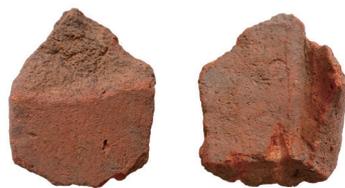
1の写真



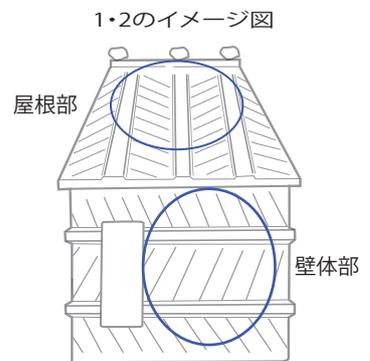
2の写真



3の写真

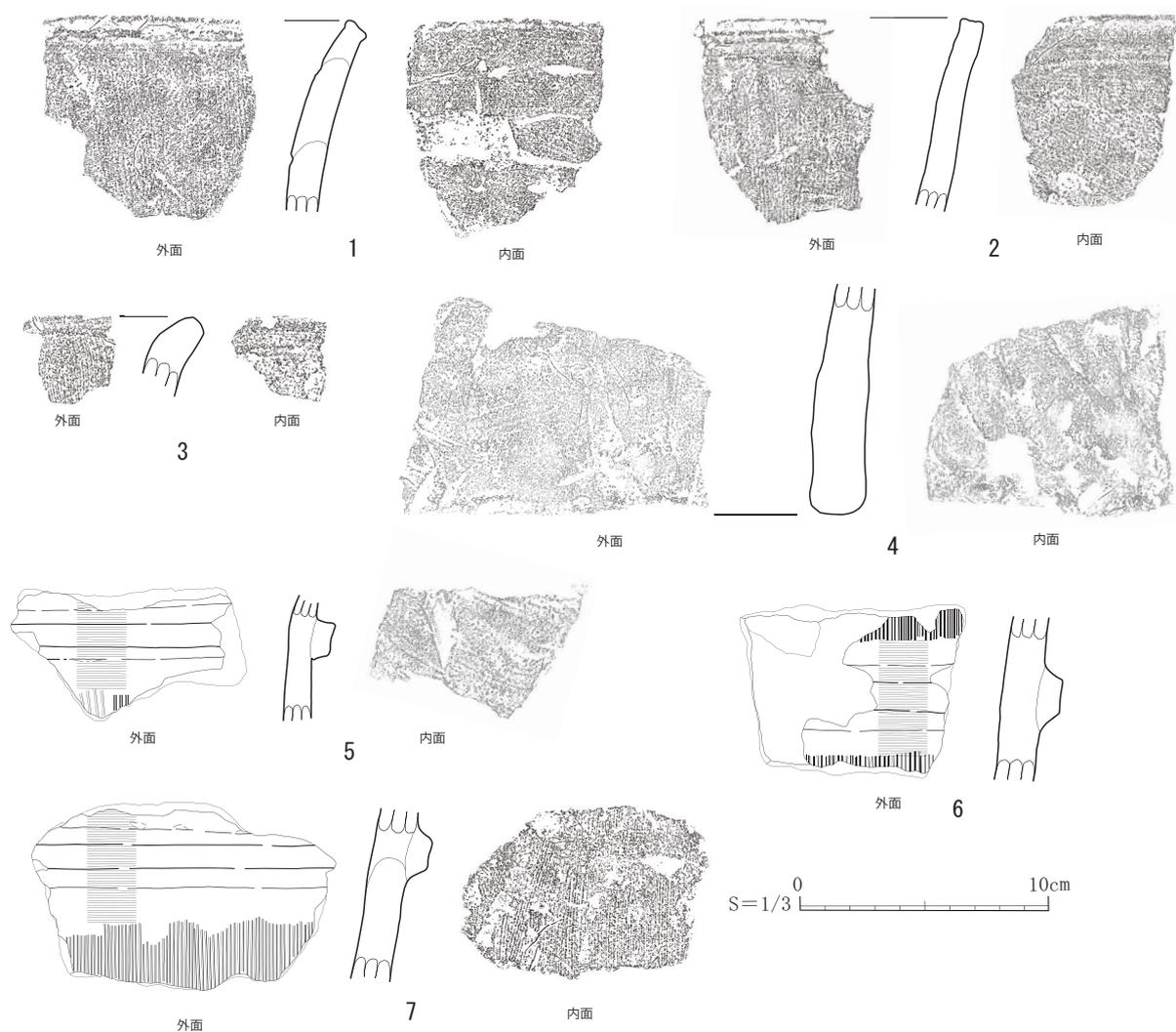


写真は縮尺不同



1・2のイメージ図

第2図 温南山古墳出土の形象埴輪



第3図 温南山古墳出土の円筒埴輪

註1：温南山古墳はこれまでの論文等で「温南塚古墳」という名称が使用される場合もあったが、本市では遺跡登録名から「温南山古墳」と呼称している。「地頭塚」との別称もある。

註2：令和2年度に行われた古墳周辺の堀内遺跡の試掘調査では、現地表面から約2m下の下層から浜堤砂層が確認され、その上層には約1mの厚さの洪水による河川堆積物の砂層（古墳の南東部を流れる五間堀川に起因するものか）が堆積している。これらの砂層が古墳の主たる築土とみられる。

【引用・参考文献】

川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻 第2号

結城慎一・藤沢敦 1987 『大野田古墳群 春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第108集

山形市教育委員会 1991 『菅沢2号墳』

会津坂下町教育委員会 1992 『経塚古墳 経塚遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第29集

三輪嘉六・宮本長二郎 1995 「No. 348 家形はにわ」『日本の美術5』至文堂

名取市歴史民俗資料館年報 — 令和3年度 —

発行：名取市歴史民俗資料館
〒981-1224
宮城県名取市増田一丁目7-37
TEL022-724-7935/Fax022-724-7936
URL：<https://natori-shiryokan.jp/>
発行日：令和4年6月30日

印刷：有限会社さとう印刷
〒981-1241
宮城県名取市高館熊野堂字余方下5-3

